

## 【論文】

# 小西重直の教育学におけるニーチェ受容とその特質

松原 岳行

## はじめに

本稿の目的は、小西重直（1875-1948）の教育学においてニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）の思想がどのように受容されたのかを明らかにし、その特質を考察することである。

小西重直は、篠原助市（1876-1957）や長田新（1887-1961）らと並び、近代日本の教育学形成期を語るうえで無視することのできない重要な教育学者であるが、日本の教育学史上もっとも早い時期にニーチェに言及し、1917年には「ニイツエの学制論」という論文を発表した点においても注目される。ところが、わずかな例外<sup>註1</sup>を除いて小西教育学におけるニーチェ受容に触れた研究はなく、1917年論文の存在すら、ほとんど知られてこなかった。

その例外のひとつが、1998年に発表された下地秀樹の論文「『ニーチェの学制論』再考」である。下地は、日本の教育学におけるニーチェ受容の先駆的試みとして、入沢宗寿（1885-1945）、中島半次郎（1871-1926）、田制佐重（1886-1954）、篠原助市らの著作論文を挙げつつ、小西重直の1917年論文「ニイツエの学制論」を「やや異彩を放つ個別研究」（下地 1998, 174頁）と特徴づけ、次のように述べる。

本稿の標題と関わって興味深いのは、彼【※引用者註：小西】が「教養施設」【※引用者註：講演論文「われわれの教養施設の将来について」】を一応は「学制論」として読もうとしたということである。彼は、「教養施設」のみに絞って、これを学制改革の根本精神を述べたものと解釈し、自らの制度思想を対比させている。すでに示唆しているように、「教養施設」については、制度を超えた批判のはじまりとしての意義はあっても、制度構想ではないというのが常識的解釈で、このような試みは極めて珍しい。珍しいといえ、  
「教養施設」に絞った当然の結果として、ここには「個性」も「個人」も使われていない。また、些細なことのようにだが、「教養施設」の原書は入手しておらず、英訳に依拠したといい、書名を「吾人の学校の将来に就て」と訳していて、これも他の論者とは異なっている。篠原はまったく無視しているが、入沢も中島も田制も、何に基づいたのか、一致して「我が教育制度の将来」と訳していた。教養施設にあたる言語はBildungsanstalt(en)、小西が依拠した（と思われる）J・M・ケネディの英訳はeducational institution(s)

なので、どちらも無理ではない。おそらく小西は、より具体的なイメージで捉えようとしたのであろう。その結果は、「教育を制限して強者の教育を施せ」とのニーチェの意見に対し、「問題になるのは何れの程度より如何程迄に此を制限するかである」と、具体的に問おうとしながらも、「教育の普及といふことと強者の現出、嚮導者の現出といふものはニツエが考ふる様に相反するものでなく……現代の教育問題の重要問題として其両立の方法が研究されねばならない<sup>註2</sup>」というものであった。ドイツと日本の近代化（とくに教育制度）の時間差と違いが、そこから視けるようである。（下地 1998, 174-175頁）

下地は、小西がニーチェの講演論文「われわれの教養施設の将来について」を「学制論」と解釈したことに對して「極めて珍しい」と評価しつつ、他の教育学者とは異なり「個性」や「個人」の意義を強調するニーチェの姿が描かれていないこと、小西がドイツ語原典ではなく英語版に依拠していること、さらに講演論文の和訳が他の教育学者とは異なっていることなどを指摘する。ただ、論文の具体的内容についてはほとんど触れておらず、ニーチェの見解を修正するような小西の批判的コメントをわずかに紹介し、最終的には小西とニーチェに生じた齟齬の一因を日本とドイツの相違に求めて、それを結論としている。

しかし、このような大局的な結論では、小西のニーチェ論が持つ意味は失われてしまうのではないか。1917年の論文「ニツエの学制論」が重要なのは、日本を代表する教育学者である小西重直がニーチェの思想と一対一で向き合い、非教育学者ニーチェの教育観を論じたという事実であり、その具体的な中身である。つまり、これまでの研究では、小西による1917年のニーチェ論も、小西教育学におけるニーチェ受容の実態も、ほとんど解明されていないのである。

以上のような問題関心から、本稿では、まず小西重直のプロフィールを踏まえたうえで、同時代人の証言から小西教育学の特徴を把握する。続いて、小西のニーチェ受容／非受容を時系列的かつ網羅的に確認し、その実態と特質を考察する。これらを踏まえ、近代日本の教育学形成期に重要な役割を果たした教育学者、小西重直の教育学におけるニーチェ受容の意味を検討することが本稿の目的である。

## 1. 小西重直とその教育学

### (1) 小西重直のプロフィール

小西重直は1875（明治8）年1月15日、旧米沢藩士である父富所幸吉と母タケの長男として山形県米沢市に生まれた。富所代吉（とんどころ しろきち）として人生をスタートさせた小西であったが、早くに父親を亡くし、経済的に困窮した母親は幼い小西を背負ったまま川に入水

して母子心中を企てたほどであったという。こうした事情から、母親の従兄弟である旧会津藩士・小西馬之允の養子となる話が持ち上がり、富所代吉は小西姓を名乗ることとなった。

その後の小西は、私立の日新館、福島県尋常中学校に学び、1894年に第二高等中学校へ入学した。ちょうどこの頃、尊敬していた杉浦重剛と中村正直から一文字ずつ名をもらい、代吉から重直へと改名した。正真正銘、小西重直の誕生である。第二高等中学校を卒業した小西は1898年に東京帝国大学文科大学哲学科へ入学、井上哲次郎（1856-1944）、ケーベル（Raphael von Koeber, 1848-1923）、大瀬甚太郎（1866-1944）らの薫陶を受け、1901年7月、首席で卒業した。

同年8月には同郷の塩見元子と結婚したが、新婚まもない翌1902年2月23日から1905年5月までドイツとイギリスで約3年間もの留学生活を送ることとなる。もっとも、この留学は小西自身の希望ではなく、優秀な若手教育学者に最新の教育学を学ばせる目的で文部省が命じたものであり、帰国後には、広島高等師範学校の教授に就任することが確約されていた。なお、主な留学先はライプツィヒ大学で、師事した教授は美学を専門とするヨハネス・フォルケルト（Johannes Volkelt, 1848-1930）であったという。

帰国した小西は1905年6月より広島高等師範学校教授として教育学を講じ、1908年12月に文部省視学委員、1910年7月には文部省視学官となる。1912年9月からは第七高等学校造士館長を務め、1913年8月、沢柳政太郎（1865-1927）の招聘を受け、谷本富（1867-1946）の後任として京都帝国大学文科大学教授に就任することとなった。文学博士の学位が授けられたのはこの年の12月、小西39歳のことである。

京都帝国大学教授時代には、立命館中学校学監や成城小学校学園顧問、玉川学園理事を務める傍ら、多くの著作論文を発表した。1921年8月から1922年7月にかけては、沢柳政太郎や長田新らとともに海外視察へ赴き、第1次世界大戦後の欧米各国における教育事情を調査し、1933年3月には京都帝国大学総長に就任した。しかし、大学における学問研究の自由を揺るがしたいわゆる「京大滝川事件」により、就任からわずか3ヶ月足らずで小西は総長を辞任し、1936年に東京へ転居した。

その後は、成城小学校や玉川学園の顧問を務めながら、時局の教育について積極的に発言し、1942年5月には興亜工業大学学長にも就任するなど、意欲的に活動する。戦後は、祖国の再建を企図して自ら率先して開墾生活を送ったほか、戦争孤児の教育支援にも力を注いだとされる。終戦から3年が過ぎた1948年5月、自伝的著作『感謝の生涯』を刊行し、同年7月21日、自宅にて逝去した。享年74歳であった。

では、このような人生を歩んだ小西重直の教育学を同時代人はどのように捉えたのであろうか。以下では、小西の弟子に当たる渡部政盛（1889-1947）および長田新の証言を手がかりに小

西教育学の特質を把握しておこう。

## (2) 渡部政盛が見た小西教育学

渡部政盛は1929年の著作『若き教育者に与ふる書』に「何となく好きな小西重直先生」と題する一文を掲載し、その冒頭を「先輩であつて友人，友人であつて先輩，而していはゆる先輩でない先輩に，小西重直先生のあることは，自分としては極めて妙に思つてをる」（渡部 1929, 261頁）と書き出している<sup>註3</sup>。「先輩であつて友人，友人であつて先輩」という表現にも象徴されているように，渡部と小西は通常の師弟関係という枠には収まらない親密な関係にあったと思われる。渡部はこの不思議な関係性を次のように説明する。

*先生が自分にとって先輩ならざる先輩であると云ふことには，少しく説明を要するものがある。先輩でないとは，自分は先生から直接教へを受けたこともなく，学校等を同じうした事実もなく，また先生から就職その他で世話になつたこともない。この点に於ては全くあかの他人でいさゝかの関係もないからである。にもかゝらず自分がひとりぎめに先生を先輩として崇敬してをるのは，間接に先生から思想上，人格上少なからぬ影響感化を受け，また自分の良心が，何等の義務感や儀礼観を伴ふところなく，氏を「先生」と呼び得る程，それ程全人的に先生を自分が好いてをるが故である。（渡部 1929, 262-263頁）*

このように，思想的にも人格的にも小西の影響を受けたと自認する渡部は，親しみを込めて小西を「先生」と呼んでいる。渡部は，影響を受けた人物として，谷本富，大瀬甚太郎，吉田熊次（1874-1964），中島半次郎の名も挙げているが，小西重直は別格だったようである。では，渡部は小西の教育学をどう特徴づけているのであろうか。

1920年の著作『日本教育学説の研究』において渡部は，個人的教育学説，社会的教育学説，調和的教育学説，生活完成の教育学説，文化的教育学説，人格的教育学説，實際的教育学説，自動的教育説，公民的教育説，分団式動的的教育説，創造本位教育説といった諸説を取りあげ，小西重直を，大瀬甚太郎，森岡常蔵（1871-1944），溝淵進馬（1871-1935）とともに「調和的教育学説」の提唱者に分類している。

1920年と言えば，小西が京都帝国大学教授だった時代であり，1917年のニーチェ論もすでに発表していた頃である。「最近我が教育学界に，著しく名声を高めた学者は，文学博士小西重直氏である」（渡部 1920, 227頁）——渡部は「小西重直氏の教育説及其批判」の冒頭をこのように書き出し，小西を教育学者として高く評価する。「氏は学者にして人格者である。学風は其の人格的傾向の然らしむるが如く，穩健にして中正である故に一口に言へば調和的教育学

派に属すべき人である。けれども其の間に、独自の思索より来る独創的意見がある。故に世の所謂可も無く不可も無き、折衷的学者と同一視すべきでは無い。」(渡部 1920, 228頁)

渡部はたとえば小西教育学の特徴として「意志教育思想が其の根底を形造つてをること」を挙げ、「此の考は当時尚ほヘルバルト派の夢未だ醒めきらなかつた我が教育界の所説としては、大いに推賞するに値するものである」(渡部 1920, 249頁)と評価する。また、「其の学説中に著しく実験教育学的要素を採入れてをること」も指摘し、「就中ライ等の筋肉運動主義、活動主義、発表主義をとり入れて、其の根本思想たる意志教育主義に一面の科学的合理的基礎を与へてをる所は、たとひ翻案的なりとは言へ、見逃してはならない」(渡部 1920, 249-250頁)と、学説としてのオリジナリティや意義を強調する。

しかし、渡部によれば小西教育学の最大の魅力と意義は、「学説」それ自体のうちにはなく、その学説を生み出した背景、すなわち小西自身の「人格」に起因するという。渡部に言わせるなら、「此の学者【※引用者註：小西】の言説が総て確き信念の下に湧出し、人格的背景と常にピタリと一致しをること」こそ、小西教育学の真骨頂なのであり、「此の点は到底他の学者諸氏の追縦を許さぬ、氏の独壇場である」(渡部 1920, 249頁)<sup>註4</sup>。ただ、一方で「其の反面には弱点が無いではない」(渡部 1920, 250頁)とし、「教育思想の論究が未だ十分で無いこと」を小西教育学の課題として挙げる。とりわけ「極めて安価に教育勅語<sup>註5</sup>を持来り、其の上何等勅語の学理的根拠を闡明するのでもなく、これ我が国教育の大理想なりと指示する」点については、「まことに学者としては軽卒<sup>マ</sup>であり、不見識であり、随て其の結論もいかゞはしきものとならざるを得ぬ」と酷評し(渡部 1920, 250頁)、「もつと教育学の原理たるべき一般的理想の形式と内容とを学術的に論じ、然る後に日本教育の理想として勅語を持出すべきだつた」(渡部 1920, 251頁)と批判している。

以上からも明らかなように、渡部にとって小西重直は教育学者というよりもむしろ教育者だったのであり<sup>註6</sup>、したがってまた小西教育学も、学説それ自体ではなく、小西の人格的魅力<sup>註7</sup>を背景として評価されるべきものと判断されたのである。

### (3) 長田新が見た小西教育学

長田新は渡部とは違い、広島高等師範学校と京都帝国大学において小西の指導を受けた、いわば正真正銘の弟子に当たる。そうした関係性もあって、小西が逝去した後、長田は複数の媒体で小西とその教育学についてコメントしている。たとえば日本教育学会編『教育学研究』第17巻第4号に掲載された追悼文「小西重直先生を憶う」の中で、長田は次のように述べる。「吾が小西先生の生涯こそ一人でも多く愛するために生きてた生涯ではあるまいか。だから先生に

は敵がなかつた。先生は敵というものを知らなかつた。「敵を許す」とか「敵を愛す」という言葉があるが、先生には許すにも愛すにも敵というものがなかつたのである。」(長田 1949a, 12頁)

追悼文という点を差し引いても、長田が小西の人格を高く評価していたことがうかがえよう。こうした人格者としての描写は、渡部の小西評とも重なる。長田は、小西によるペスタロッチ讃美をそのまま援用し、「先生こそ実に人間であつて神、神であつて人間、人間の世界と神の世界とをつなぐ神人でありました」と小西の生涯を称えた(長田 1949a, 13頁)。小西重直は、まさに長田も言うように、多くの人を愛し、多くの人から愛された人格者であったと言えるだろう。では、長田は小西の教育学をどう特徴づけているのであろうか。

たとえば長田は、成城学園初等学校研究推進部編『教育改造』第16号誌上で特集された追悼座談会「新教育と小西重直先生」において、「実に多方面の内容を小西教育学はもつておつた」(長田ほか 1948, 19頁)と述べつつ、小西教育学を次のように総括する。「だから僕は、小西教育学は永遠の生命があると思う。つまり知識でも教育的構造はあるが、やはり人格と知識が互いに媒介し合っていない知識は、教育的知識にはならない。従つて学問的に理論的にはずいぶん勝れた人もあるが、それには生命はない。すべての知識がそうかもしれないが、特に教育的知識は人格的なものと知識的なものがほんとうに媒介し合わないと生命はない。労作教育の話が出たが、小西教育学はどの部分をとつても先生自身の人格的体験と理論的知識がみんな相互に媒介しておる。だからその知識というものはただちに生命の根源ともなり、永遠な一つの働きというものを生んでいくほんとうの力になる。そういう角度から考えて、小西教育学は独特のものである。」(長田ほか 1948, 22頁)

小西自身の人格的体験と理論的知識が互いに媒介し合つて小西教育学が成立するという捉え方は、渡部のそれとほぼ同一である。長田の見るところによれば、小西教育学は、決して一教育学者によって発表された単なる学説ではなく、小西重直という神人の如き人格者によって紡ぎ出された永遠の生命なのである。

右の如くに見て来て小西先生の教育学が凡そ人々の呼んで「教育的的」(Pädagogisch)と言つてゐるやうな性格を欠いてゐるところに特色を有つてゐる事を人々は知り得るだろう。事実既に前にも述べたやうに教育的にものを考へる事は先生のもともと欲しなかつたところである。教育的でなくてどうして教育学が形成されたらうか。先生は単に教育的に考へなかつただけではなくて科学的にも考へなかつた。然らば教育的でもなければ科学的でもない先生の教育学とは一体如何なる性格の教育学であるだらうか。教育的にも考へずまた科学的にも考へない先生は自己自身で考へた。否な自己自身教育を行はずること

依つて教育学を形成した。このやうにして先生の教育学にはもともと何等の学的成心なく従つてそれだけに眞の主体性がある。先生の教育学は教育学的教育学でもなければまた科学的教育学でもなくて実に主体的教育学である。(長田 1949b, 16頁)

京都哲学会編『哲学研究』第384号に掲載された「小西重直先生の教育学に就いて」の中で長田はこう述べてつ、「先生の教育学こそ言葉の最も厳密なまた最も本来的な意味における人格教育学 (Persönlichkeitspädagogik) であり体験の教育学 (Erlebnispädagogik) であり生命教育学 (Lebenspädagogik) である」(長田 1949b, 16頁)と特徴づけている。体系的教育学と一線を画し非教育学的なものを志向する姿勢に、長田は「小西らしさ」を看取していたのである。

では、調和的教育学、主体的教育学、人格教育学、生命教育学などと特徴づけられる小西教育学<sup>註8</sup>はニーチェの思想をどう受容したのだろうか。

## 2. ニーチェに対する最初の反応

### (1) 東京帝国大学卒業論文「倫理上の自我観念」(1901年)

小西が最初にニーチェに言及したのは、1901年発行『哲学雑誌』第16巻第176号と第177号に収録された論文「倫理上の自我観念」においてである。「学生々活の日課に逐はれつゝ、短日の間に物したる粗雑なる拙稿、何等特種<sup>ママ</sup>の研究の結果を得たるにもあらず、唯た平凡なる常識より出てたる極めて平凡なる思想を叙述したるに過ぎざるのみ。編集員の勧めにより本誌の貴重な紙面を汚すは深く自ら恥づる所なり。」(小西 1901b, 793頁)——小西がこう述べるように、これは東京帝国大学在学中に執筆された卒業論文であり、『哲学雑誌』の編集担当に勧められて掲載の運びとなった小西のデビュー作<sup>註9</sup>である。では、この論文においてニーチェはどのように登場するのであろうか。

蓋し自我の性質關係を明かにして以て其行動の規範を定むるは実に倫理学の根本的問題なり、豈に余輩の浅学を以て之を解説し盡すを得んや。然りと雖ども古來幾多の倫理説の起るありて或は幸福主義となり、快樂主義となり、功利主義となり、又は利己主義となる、殊に十九世紀の終末に当て「ニイチェー」氏の如き超人的理想を鼓吹し極端なる利己主義を主張し「ソークラテース」氏を希臘第一の零落者と嘲り、「カント」氏を智識的不具者と罵り、独逸に於ける青年は争ふて之れに傾聴し斯国の倫理界は為めに少しく其趨勢を改めんとするの傾向なしとせず。蓋し倫理思想は須らく着実確的なるを要す、敢えて人目を驚動するが如き奇怪なるものを要せず。吾人は少くとも日本に於ける倫理界を堅固にし危険なる学説をして

其堡壘に近かしめざるを務めざるべからず。思ふに諸種の怪説起るは必竟倫理上の自我の意義を誤解するに基くを頗る大なり。(小西 1901b, 793-794頁)

倫理学に関する諸々の立場が紹介され、その一つである利己主義の代表的存在としてニーチェの名が上がっていることは明らかであろう。小西によれば、いわゆる超人思想を主張したニーチェは、ソクラテスを「希臘第一の零落者」と嘲弄したり、カントを「智識的不具者」と罵倒したりして、ドイツの青年たちから注目を浴びているという。しかし、倫理思想はいささかも奇をてらう必要はなく、むしろ堅固かつ確実な内容でなければならない。こうして小西は、超人に象徴されるニーチェの極端な利己主義を「危険なる学説」として批判しつつ、「吾人は(…略…)敢えて又「ニーチエー」氏の所謂超人間たるを要せず、須らく尋常の人間として勤勉なるべきなり、勤勉は連続的行為にして自我活動の中枢なればなり」(小西 1901c, 939-940頁)と結論するのである。

興味深いのは、小西が“Nietzsche”を「ニーチェ」や「ニイチェ」ではなく「ニイチエー」と表記し<sup>註10</sup>、“Übermensch”を「超人」ではなく「超人間」と翻訳している点である。当時「ニイチエ」表記は珍しくなかったが、「ニイチエー」と表記する例はあまり見られず、また「超人間」という表記も、管見の限り小西以外には確認できていない。おそらく東京帝国大学在学中に聴講したドイツ系ロシア人講師ケーベル<sup>註11</sup>やドイツ留学から帰国したばかりの井上哲次郎による筆記や発音などの限られた情報を手がかりに、“Nietzsche”や“Übermensch”を小西自身が翻訳したのであろう。見方を変えれば、小西はそれだけ早い時期からニーチェに言及していたということでもある。小西は、日本でまだ「ニーチェ」や「超人」がメジャーになる前に“Nietzsche”を知り、「ニイチエー」の「超人間」を批判したのである。

## (2) 松本孝次郎との共著『教育学新教科書』(1902年)

次にニーチェへの言及が見られるのは、教育心理学者の松本孝次郎(1870-1932)との共著『教育学新教科書』(松本・小西 1902)においてである。「本書は普通教育学の概要を叙述するを以て目的となし、而かも、現今の進歩せる学説を紹介することを努めたり。」(松本・小西 1902, 凡例1頁)——東京高等師範学校教授という松本の肩書きからも明らかなように、この著作は教員養成のためのテキストであった。その中にニーチェが登場するのである。

最近の哲学思想・倫理思想に波瀾を起し、思想界・文芸界の大立物として、学者の注意を惹き起したる此のニーチエ氏は「人世は、区々汚穢なる愚痴に過ぎずして、小児の新に生まるる毎に、塵芥は、益々多

く此の世に堆積す」といひ、これに反して、十八世紀後半より十九世紀前半に亘りて、自然の姿を歌ひたる英国の詩人ウオーズワルス氏は、其の愛児に向ひて「汝の面上に、笑ひの光は、曙光の如くに射来る。そは、まことに、天が、汝の生命のかよわき活動を支へ、汝の寂寞を慰め給ふことの穩かなる確証なり。」といひて、新生児に対する両者の児童観は、全く相異なれり。(松本・小西 1902, 6-7頁) ※下線は原文ママ

まず注目したいのは、ニーチェが「最近の哲学思想・倫理思想に波瀾を起し、思想界・文芸界の大立物として、学者の注意を惹き起したる」人物として紹介されている点である。波瀾の具体的内容やニーチェに注目した人物名については語られていないが、ニーチェ思想の影響力を認めた発言と解釈してよいだろう。

次に注目したいのは、取り上げられたニーチェ思想の中身とその評価である。引用されている文章はニーチェ思想を象徴するようなニヒリズムの見解であるが、この中でニーチェは新生児を「塵芥」と特徴づけ、その存在意義を全否定している。その一方で、比較対象である「英国の詩人ウオーズワルス」ことワーズワース (Wordsworth, W. 1770-1850) は、いわば天に祝福されるべき存在として新生児を肯定的に捉えている。

このように全く相異なる児童観を示すニーチェとワーズワースであるが、松本・小西は両者の相違を認めた上でニーチェとワーズワースの「いづれに与みすべきか」と問い、次のように答える。「若し、それニーチェ氏の児童観に従ひて、児童を以て塵芥と見做さば、教育なる働は、無意味とならざるを得ず。何となれば、塵芥は、如何にこれを磨くとも、如何にこれを清むとも、到底塵芥たるを免れずして、発達なる現象は、遂に顕れ来たるを得ざればなり。この故に、吾人は、寧ろウオーズワルス氏の児童観を取りて、児童には、一種の靈性あることを認めざるべからず。」(松本・小西 1902, 7頁)

松本・小西がワーズワースの児童観を首肯していることは明白であろう。「なるべく、現在に於ける我国の状態に適することを期せり」(松本・小西 1902, 凡例1頁) という本書執筆の意図を踏まえれば、ニーチェの児童観は当時の日本に不適合と判断されたとも言える。新生児の誕生を嫌悪し子どもの存在意義を否定するようなニーチェの見解は、教員養成のためのテキストの内容として相応しくないと判断されたのである。

以上に確認したとおり、小西重直は執筆デビュー直後の著作論文において立て続けにニーチェに言及している。1901～1902年という時期のニーチェへの言及は、中島半次郎の1905年、長田新の1921年、篠原助市の1922年、田制佐重の1922年など、同世代の教育学者の場合と比べても、かなり早いと言えるだろう。先に触れたケーベルや井上哲次郎、また第二高等中学校時

代に出会った高山樗牛（1871-1902）は、早くからニーチェに関心を寄せていた人物であり、いわば日本におけるニーチェ受容の立役者であった。おそらく彼らとの交流を通じて小西はニーチェの思想に触れ、極端な利己主義やニヒリズム的な怪説という第一印象を抱いたのだろう。小西は留学する前からニーチェを知っていたのである。

### 3. 留学とその後のニーチェへの言及

#### （1）留学中の小西重直

先述したように、小西は1902年2月23日から1905年5月までドイツとイギリスで約3年間もの留学生活を送った<sup>註12</sup>。最新の教育学を学ぶための留学であったにもかかわらず、小西はライプツィヒ大学で美学の大家フォルケルト教授に師事したという。ここでは長田の証言から、留学中の小西の様子をより具体的に探ってみることにしよう。

追悼論文「小西重直先生の教育学に就いて」の中で、長田は次のように述べる。「先生に言はせるとライプチヒ在留期間にも先生は所謂体系的な教育学には何の興味も感ぜず、この方面の書物は買ひ求める勇氣更になく、特に近代的な教育学と銘打つたものには嫌悪の念を催し反逆の気分さへ起り、僅にベスタロッチャーやシュライエルマッヒャー等の教科書に注意を払つただけで、寧ろ大哲学者や大詩人の著作に親しみ、シルラーの詩集を持つてライプチヒ郊外の森に入り山雀の声を聞いたり詩を口づさんだりするのをこよなき楽しみにした。而もライプチヒで当時世界の心理学の最高指導者として声望隆々たるウィルヘルム・ヴント教授には目もくれず、終始一貫美学者ヨハネス・フォルケルト教授に師事して、彼に私淑し彼を憧憬して公的にも私的にもその指導を受けたことも先生の教育学の特色を知らうとする者の見逃がすことの出来ない出来事ではあるまいか。これには当時文筆を以て一代の青年を感激させた彼の樗牛高山林次郎——彼は二高時代先生の先生だつた——が、近代の哲学者のうちで文章の術で秀でた上に真に「潤ひのある温かな人間味の豊かな」著者はショーペンハウエルとフォルケルトとの二人であると言つて、フォルケルト教授を激賞したことも与つて大いに力があつたらう。」（長田1949b, 1415頁）

このように、小西はいわゆる近代教育学にも最先端の心理学にも興味を示さず、教育学者ではない美学者フォルケルトにもっぱら指導を仰いだようであるが、長田によればその一因は、第二高等学校時代の恩師である高山樗牛がショーペンハウアーとともにフォルケルトを賞賛していたという点に求めることができるという。

それにしても、帰国後に広島高等師範学校教授として教育学を講じることが確約されていた

留学とは思えないほど、小西は体系的教育学を敬遠している。ペスタロッチーやシュライエルマッヒャーのような体系性に乏しい古典的教育学を除けば、むしろシラーのような詩人や哲学者の著作を好んで読んでいたという。では、具体的に小西は誰の著作を読んだのだろうか。追悼文「小西重直先生を憶う」の中で、長田は次のように述べている。「在留三年、その間先生自身嘗て私に語られたこともあるように、教育学らしい教育学は研究せず、ゲーテやシルラーやニーチェやトルストイの作品を耽読し、ライプチヒの新劇場の歌劇とゲワントハウス（音楽堂）の音楽にはしげしげ足を運んだ。三年の留学期間が終つてきて帰国の船に乗ると先生は忽ち憂鬱になつた。というのは帰国すると広島高等師範学校で教育学の講義をすることになつていたからである。こういうところにもロマンティックカーとしての先生の佛が窺えるではあるまいか。」（長田 1949a, 28頁）

長田の証言によれば、留学中の小西は、教育学の研究はせず、もっぱらシラー、ゲーテ、トルストイ、ニーチェの作品を愛読していた。具体的に小西がニーチェのどの作品を読んだのかは不明であるが、留学前にケーベルや高山樗牛等から仕入れていたであろうニーチェの情報を、小西は留学中に十分更新することができたのである。

## （2）帰国後の小西によるニーチェへの言及

### —ケイの『児童の世紀』、ライの実験教育学との関係性—

留学先から帰国した小西は、当初の予定通り広島高等師範学校に教授として着任し、教育者としての仕事を開始する。その一つの柱は著作論文の執筆であった。帰国後最初の論文は、帝国教育会編『教育公報』第292号に収録された「瑞西奥洪伊国巡歴報告」（1905）である。次に、広島高等師範学校教育研究会編『教育研究会講演集』第1号に掲載された「趣味教育に就いて」（1906a）、さらに国学院大学編『国学院雑誌』第12巻第4号に収められた「品性の二大要素に就て」（1906b）と続くが、これら3論文においてはニーチェへの言及は見られない。

帰国後の小西がニーチェに言及した最初の論文は、『教育学術界』第13巻第4号および第5号に掲載された「エレン、ケイの『児童の世紀』に就て」（1906c）と「エレン、ケイの『児童の世紀』に就て（其の二）」（1906d）である。執筆時の肩書きは、広島高等師範学校教授および文学士であった。エレン・ケイの『児童の世紀』は1900年にスウェーデンで出版された著作であるが、小西によれば、「千九百〇二年に其原書よりも少しく省略せられたものが独逸語で出版せられ、丁度其年の秋に余は之を「ライプチヒ」の或書肆に於て偶然に発見し、帰宅後直ちに読み初めて仲々面白く感じた」（小西 1906c, 16頁）という。では、小西はこの著作を特徴づけたのであろうか。

「エレン、ケイ」女史の著書「児童の世紀」は現今の教育の理論及其実際の活動に対してはたしかに急を報する警鐘であつて、少しく大袈裟に言へば、女史は教育界の「ニイチエー」であると言ってもよからうと思ふ。」(小西 1906c, 16頁)——小西が『児童の世紀』を現代教育の理論と実践に対する「警鐘」と捉え、その著者であるケイを「教育界の「ニイチエー」」と特徴づけていることは明白である。「少しく大袈裟に言へば」という限定条件が付されてはいるものの、ケイとニーチェとの親和性を小西が認めていたことは疑いを容れないだろう。小西がケイを教育界のニーチェと表現したということは、小西がニーチェを教育界の人間だと認識していなかったこと、またケイよりもニーチェの方が有名であると認識していたことの証でもある。実際、小西はケイに対するニーチェ思想の影響力を次のように説明する。

元来女史は「ニイチエー」及「ダーキン」「スペンサー」等より学説上の影響を受けて居ることが多いのであつて、吾々人間界の生存競争の形を高尚にせようと思ふ考の方式は詩人「シルレル」に似て居ることは前に一寸言うて置たが、女史自ら標榜する所によれば、矢張直接には「ニイチエー」の思想より影響を受けたものと見ゆる。即女史の此考は「ニイチエー」が人間と云ふものは動物と超人間との間に居る橋梁であるが故に、人類を高尚にして其理想に達せしむることは即人間の義務であると思ふ事と同一徹の様であつて、女史自ら「ニイチエー」の此考を賞賛して居るのである。(小西 1906c, 19頁)

このように、ダーウィン、スペンサー、シラーの影響を認めつつも、小西はケイに対するニーチェの影響力の大きさを強調し、具体的なニーチェ思想としていわゆる「超人」——小西はここでも「超人間」と表記している——を挙げる。小西に言わせれば、ケイはニーチェを私淑していたのである。

もっとも小西は「女史と「ニイチエー」とは其思想が全然同一であるとは言はぬ」とも述べ、「ニイチエー」は人生発展の精神的本義を意思の活動に求めて階級的貴族的の社会制度を設けたれど、女史は之れに反して「シルレル」の理想の如く、人生の価値を其感情の発表なる芸術に求めた」点において、ケイの主張は「ニイチエー」とは大分違つて居ると指摘する(小西 1906c, 19頁)。ただ、非教育学的な存在であるニーチェがケイを媒介して——間接的にはあるが——教育学と関係を結ぶことになったのは事実である。

エレン・ケイの『児童の世紀』に関する論文発表後、小西はライの実験教育学についても一連の論文を執筆し、『教育学術界』誌上(第14巻第2号～第16巻第2号)に発表した。当初のタイトルは「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要」であったが、後に「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評」と改められている。このうちニーチェへの言及が見られるのは

最初の論文であり、具体的には以下のとおりである。「[「ショーペンハウエル」の哲学主義即ち存在及生存の意志は「ニエチエー」に至て力の意志となり、此等の哲学は自己生存の動向を中心とせる「ダーキン」の進化論と相纏綿して種属の生活維持に関して頗ぶる大なる影響を与へ、又「ヴント」「ロマーネス」及「シュナイデル」等の動物精神に関する研究、及現今の児童の精神に関する研究はまた動向の原本意義及意志の力に関して確実明瞭なる説明を与ふる様になつた。」(小西 1906e, 28頁)——ここではニーチェ思想の一つである“Wille zur Macht”が「力の意志」として紹介され、哲学や心理学をも包摂する教育学説史の系譜上にニーチェが位置づけられている。

小西が留学した1902年～1903年といえば、ちょうどドイツを中心に新教育運動が最盛期を迎え、教育界に対するニーチェ思想の影響力と意義がクローズアップされていた時期である。小西はまさにこの留学中に、ケーベルや高山樗牛等から仕入れていたニーチェ思想に関する情報を更新し、少なくとも留学前よりは中立の立場で、ニーチェを教育学上に位置づけようとしたのである。

### (3) 小西によるニーチェ評価のトーンダウン

#### —冷遇とマイナス評価—

しかし、ニーチェに対する小西の評価が大幅なプラスに転じることはなかった。たとえば、1907年の講演筆記録『教育学』には、小西の発言が次のように記録されている。「独逸の哲学者ニエチエー氏は人類社界は意志の強弱によりて階級が定まるもので意志の強きものは弱きものを制すると云ふけれども此説は平等を主張するキリスト教、信者及び男子よりも弱き意志を有する婦人社界より多くの攻撃を受けたのであるが公平に見ても此説は余り極端である」(小西 1907c, 24頁)——小西が「公平に見ても此説は余り極端である」として、意志の強さを重視するニーチェの考えを一蹴していることは明白であろう。

1908年には単著『学校教育』を公刊したが、ケイやグルリットなどの新教育関係者、ディルタイやレーマン、ツィーグラールなど当時のドイツを代表する教育学者に触れている一方で、ニーチェには言及がない。また、広島高等師範学校教育研究会編『教育研究会講演集』第3号に収録された論文「筋肉運動主義の教育に就て」(1908a)をはじめ、『香川県報徳講演集』に収められた「推譲と教育」(1909)、『教育研究会講演集』第5号掲載の「無我の教育」(1910)、帝国教育会編『帝国教育』第343号に収録された「群馬県教育品展覧会状況」(1911)、同じく『帝国教育』第355号掲載の「予が視察したる僻陬地の教育状態」(1912a)においても、ニーチェは登場しない。

小西の著作論文において次にニーチェが登場するのは、1912年に出版された『現今教育の研究』においてであるが、ここでの言及は新たな受容例ではなく、1906年に発表された論文「エレン、ケイの「児童の世紀」に就て」および「ドクトル「ライ」氏実験教育学に就て」（タイトル修正）の再録である。しかも、これらの論文は「本編」ではなく「附録」として掲載されており、「ドクトル「ライ」氏実験教育学に就て」に関して言えば、「ニエチエー」という誤植も修正されないうまま収録されている（小西 1912b, 附録81頁）。

また、論文「エレン、ケイの「児童の世紀」に就て」に関して言えば、1906年の初出時は「「エレン、ケイ」女史の著書「児童の世紀」は現今の教育の理論及其実際の活動に対してはたしかに急を報する警鐘であつて、少しく大袈裟に言へば、女史は教育界の「ニエチエー」であると言つてもよからうと思ふ」（小西 1906c, 16頁）となっていた箇所が「「エレン、ケイ」女史の著書「児童の世紀」は現今の教育の理論及其実際の活動に対しては急を報する警鐘である」（小西 1912b, 附録234頁）と修正され、「女史は教育界の「ニエチエー」である」と見なした後半部分がそっくり削除されている。

誤植は訂正されずそのままになっているのに対して、ここでは意識的にニーチェが削除されており、ケイ＝教育界のニーチェという自身の見方を修正しようとする小西の強い意志が感じられる。教育家ケイから非教育家ニーチェを切り離す作業が行われたと言つてもできよう。少なくともニーチェに対する小西の教育学的評価が1906年から1912年までの間に低下したことは確実である。

1913年8月からは拠点を京都に移し、京都文学会編『芸文』第5年第1号に「フィヒテの教育思想と現今の教育問題」（1914）を寄稿したのを皮切りに、『婦人と子ども』第15巻第3号には京阪神総合保育会での講演記録である「幼児保育の方針に就て」（1915a）を、また京都文学会編『芸文』第6年第4号～第6号には「我国児童教育の普及並に普通教法に関する概説」（1915b）、「我国児童教育の普及並に普通教法に関する概説（承前）」（1915c）、「我国児童教育の普及並に普通教法に関する概説（完結）」（1915d）をそれぞれ発表した。ここでもニーチェの登場はない。

愛知県愛知郡教育会編『教育学講習会筆記録』に収められた「晩近教育思想の発達及其批判」（1915e）には、小西の次のような発言が記録されている。「今年九月一日の英国倫敦タイムスの中に「独逸の大学教育と戦争」と云ふ題の論文が掲げられてある。（…略…）又十月一日の同紙に、彼の独逸大哲学者の先生なるニエチエー（十二年許りに死す）が戦争を起したでないかと言つて居る。此人は極端なる優勝劣敗論者で意志に重きをおき情と云ふものを非常に軽く見て居る。即ち社会は意志の強いものが勝を占めるのである。女や弱者と云ふやうな者には

同情は要らない。自分で生活の出来ぬ者は助けるに及ばぬ。と云ふ主義の人で従て基督教の如き弱者に好意ある者とは大反対である。氏の考は、丁度利己主義に富んでどんな乱暴をしても勝ちさへすればよいと云ふ様な今回の戦争の独逸の態度にあてはまつて居るので、之れが戦争の原因をなしたと言つて居る、果して然るかは断言することは出来ぬが、兎に角独逸の国民生活と大学の教育とは密接な関係があると云ふことは云ひ得られる。」(小西 1915e, 45頁)

イギリスの新聞記事を紹介する文脈でニーチェが登場しているのは明らかであろう。興味深いのは、その記事がニーチェ思想を戦争の原因と断じている点である。もっともニーチェを戦争哲学者と見なすかどうかについて小西は自身の態度を留保しているが<sup>註13</sup>、ニーチェ思想のことを暴力的な利己主義と捉えるロンドンタイムスの見解には概ね賛同している。この時期の小西はニーチェを再び厳しい目で評価するようになっていたのである。

#### 4. 1917年論文「ニイツエの学制論」

##### (1) 小西が紹介するニーチェの教育論

ちょうどこのような時期に小西はニーチェの教育論を執筆した。京都哲学会編『哲学研究』第16号に掲載された「ニイツエの学制論」(1917b)がそれである。この論文では、ニーチェが1869年24歳でスイスのバーゼル大学に招聘された事実から書き起こされ、半ば単刀直入に連続講演「われわれの教養施設の将来について」の紹介がはじまる<sup>註14</sup>。

小西はまず「講義の体裁は科学的組織のものではなく仮作的対話的のものとなつて居る」(小西 1917b, 57頁) 点に注目する。ニーチェが大学生の頃に友人とピストル射撃をしようと森の中に分け入った際、ある老人と弟子に遭遇し、いつしかその老哲学者の話に聞き入ったという架空の体験談に基づいてこの連続講演は行われているが、小西は比較的詳細にその設定について説明している。「然して此老哲学者の物語る言葉が自然々々にニイツエ達若き学生の注意と尊敬とを喚び起し遂に此森の中に於て真夜中に至るまで教育問題に就て互に対話を試むることになるのであつて吾人は此仮作的対話の中にニイツエの教育観の根本が説かれて居るのを見出すのである。」(小西 1917b, 58頁) ——こうして小西は、ニーチェの教育観における重要な点を紹介していく。

「ニイツエの学制論の根本思想は機械的の国家人を作るのではなく創造的の文化人を作らんとするのである。現在生活のパンに生きんとするものよりも文化的理想的生活に入らんとする者を作らんとするのである。」(小西 1917b, 58頁) ——小西が見たニーチェの教育理想は、まさに文化的理想的生活を志向するような創造的文化人の創出であった。この理想をかなえるた

めに欠かせないのが真の教養を体現した指導者の存在であるが、ニーチェはこの指導者を「天才」と呼び、その不在を嘆く。小西はまさにこの点にニーチェの教育論の特徴を見出した。「殊に少数の大嚮導者大天才を教育し得ないことが現在の教育制度の大なる欠陥である。文化其ものに向つて突進的に修養を積む所の強者の教育が学制改革の根本思想たるべきことを高調する所に彼の教育論の特色が発揮されて居る。」(小西 1917b, 59頁)

続いて小西は、教養をめぐる二潮流の話をする。これも講演論文中の有名な論点のひとつで、〈似而非教養は拡張する一方、真の教養は弱体化している〉という意味の時代批判だが、これについてもほぼ正確にニーチェの意図を汲み、次のように代弁している。「而して教育を多数のものに普及するの結果は所謂弱者の教育となつて強者の教育とはならない。軟教育に陥りて単に機械的依頼的な国僕を作るのみであつて社会の嚮導者となる様な少数の優者強者に硬教育を施す余地を無にするのである。吾々は此等の傾向に反対し教育の拡張普及に対しては其制限と統合の必要を叫び、教育の偏狭軟弱の傾向に対しては其硬化と独立とを高調せねばならないのである。」(小西 1917b, 60-61頁)

さらに小西は、「人文中学にては生徒が卒業後大学に入り大学の学生としての自由なる生活に対し十分なる自治力独立力を養ふと称せられて居るけれども事實は決して斯の如くになつて居らぬ」(小西 1917b, 64頁)と述べ、大学教育の現状批判から真の文化的教養を説くニーチェの教育観を次のように紹介する。「独逸人に固有なる創造力や知識欲や勤勉犠牲の精神などが大学の空気の中に見られぬことになりはしないか、蓋し凡ての文化は大学に於て自由として考へらるゝものとは全く異なる所の態度に初まるのである。即ち服従、従属、訓練などが夫れである。指導者嚮導者は之れに従属する随従者を有する如く随従者はまた嚮導者を得ねばならない。」(小西 1917b, 65頁)

「現代の教育は中学に於ても大学に於ても真の天才、真の嚮導者を地平線上の低き場所に引き下げんとして居るものであつて文化的生活の実現に逆行して居るといはねばならぬ」(小西 1917b, 66頁)——このように述べることによって小西は、天才的な指導者による厳しい修養の先に文化的生活の実現を夢見たニーチェの教育観の反時代性を際立たせてもいる。では、このように要約されたニーチェの教育観を小西はどのように評価するのであろうか。

## (2) ニーチェの教育論に対する小西の評価

「以上はニイツエの教育制度に関する根本思想の大観である。彼自ら緒言で断つて居る様に彼は中学や大学の学制の改革案を作製したのではなく其時代の教育の弊風を挙げ改革の根本思想に就て述べたのみである。」(小西 1917b, 66頁)——小西は前半部をこのように概括した上

で、さっそくニーチェに苦言を呈する。

たとえば「科学的組織的に論述したのでないからして往々概念や意義が判然しないものもある」とした上で、「例へば所論の骨子ともいふべき「文化」の意味などは極めて不明瞭である」と指摘する（小西 1917b, 66頁）。また、教育界の弊風が実利主義に由来するとの見方についても、「若し教育の普及が実利主義の結果であるとするならば彼の所論に共鳴せざるを得ないのであるけれども事実は全体的に此れと一致しては居らない」（小西 1917b, 66-67頁）とし、ニーチェの批判を事実無根と断定している。小西の見るところによれば、「近代に於ては何れの国に於ても其国家及社会が各人の自由の發達の為めに、国家社会自体の發達の為めに教育の拡張普及に努力して居るのであつて単にパンの生活の為に現在の実利生活の為めのみではないのである」（小西 1917b, 68-69頁）。

ニーチェの見解を事実誤認と見なすコメントはこれだけにとどまらない。たとえば「現代の如く教育を実利生活の方便となすに至つたのは果してニイツエの説くが如く国民経済上の実利思想や、国家が学校の卒業生に付与する特権などの影響のみであるや否やは疑問である」（小西 1917b, 69頁）とか、「教育の普及は一面には軟教育に陥るの弊があるにしても他面には普及の結果一般群衆の知識や能力の程度が高くなるのであつて、従つて其多数者の中より非凡のものも現出するのであるから教育普及は非凡者を出すべき堅き地盤であると見ることも出来るのであつて教育普及といふ事は全然軟教育のみを意味するものではない」（小西 1917b, 70頁）、あるいは「教育の普及といふこと、強者の現出、嚮導者の現出といふものはニイツエが考ふる様に相反するものでなく両者は互に両立し得べきもので現代の教育問題の重要問題として其両立の方法が研究され<sup>ママ</sup>つるのである」（小西 1917b, 72頁）」といった指摘がそれである。

もっとも、小西はニーチェの教育論を全否定しているわけではない。たとえば「現代に於ては軟教育といふことは単に一概に教師が手を盡し過ぎて被教育者の自発鍛錬を欠て居るといふ様な意味は考へられて居るのであるが、吾々は現代学生の趨勢に顧み真の文化的生活を目的とせず単に実利のみに走るの教育をも軟教育と称したいといふ事はニイツエに共鳴する点である」（小西 1917b, 70頁）と述べ、「学校編成の問題や、児童本位、個性尊重の教育主張の如きも一面には此種の理想的要求を満たし得る様に研究されねばならぬと思ふ」（小西 1917b, 70頁）として、ニーチェの見解から今後の研究着想を得ている。また、「教育を制限して強者の教育を施せとの彼の意見は一面には民衆一般の教育をも許して置き、特に真の文化生活をなす嚮導者や天才を作る為めに、高尚なる教育は此を少数者に限りて施すべしとの考と見てよからうと思ふ」とニーチェの見解を概括した上で、「今日各国の教育の實際に於ても又理論としても斯くあるべきであると思ふ」と述べ、「問題になるのは何れの程度より如何程迄に此を制限

するかである」(小西 1917b, 71頁)として、ニーチェの教育論から発展的に研究課題を紡ぎ出している。ただ、まさに上述のような小西の対応が物語るように、ニーチェの教育論は——着想としては示唆に富むとしても——教育学的な補完ないし修正が必要であり、それ自体としては不完全であった。

第一の批判点は、ニーチェが学問研究を軽視していることである。小西によれば、「ニイツエは現代の専門学者の研究が余りに偏狭なる特殊問題に走るも教育の弊であるとして罵つて居るのは或る意味に於ては是認さるゝ攻撃である」(小西 1917b, 70-71頁)。しかし「研究問題は如何に狭きものであつても如何に特殊的のものであつても夫れが人生に意義あるものであるならば、又は夫れが学問上に意義あるものである場合には厳然として研究の価値を有して居るものと見なければならぬ」(小西 1917b, 71頁)と小西は述べ、「彼の攻撃の目標は余りに空漠であつて敵を逸するの感がある」(小西 1917b, 71頁)とニーチェを斬り捨てる。

第二の批判点は、ニーチェが教育問題を教育とは無関係の階級制度によって解決しようとしていることである。つまり小西によれば、ニーチェは真の文化的教養を目指すあまり一部の特権的な指導者や天才を過大評価し、結果的に一般民衆の教育よりも固定的な階級社会の実現を企図してしまっているというのである。ただ、小西は「現代に於ては此嚮導者此天才といふものと一般民衆との差はニイツエの考ふる様に左程大なるものとはなり得まいと思はれる」(小西 1917b, 71頁)と述べつつ、「傾斜的斜面的の社会生活を階段的になさんとするのは進歩の潮流と逆行することになる」(小西 1917b, 72頁)と牽制した上で、「殊に階段的の差程は永久的予定的であるといふ様なニイツエの考方は現代の社会組織の実状と甚だかけはなれたる立論であると見ねばならぬ」(小西 1917b, 72頁)との厳しい診断を下す。

小西が見る限り、ニーチェの教育論は非学問的かつ非教育的という二重の意味において妥当性を欠いていたのである。

## 5. 小西教育学のその後の展開

### —ニーチェに対する沈黙—

以上に見たように、小西は1917年論文「ニイツエの学制論」の中でニーチェの講演論文「われわれの教養施設の将来について」を詳述しつつも、最終的にはニーチェの教育観を批判的に論じている<sup>註15</sup>。小西にとってニーチェの思想はあらゆる意味において非教育学的なものであり、そのままのかたちで教育学に受容可能なものではなかったのである。小西がこの論文を教育学系の雑誌ではなく『哲学研究』に寄稿した点にも、小西の慎重かつ消極的なスタンスが象

徴されていると言えるかもしれない。では、1917年のニーチェ論発表後、小西教育学はどのような展開を見せるのだろうか。

京都帝国大学文科大学内史学研究会編の雑誌『史林』第3巻第1号に寄稿した「中学校に於ける歴史家の沿革並に其教育的価値に就て」(1918a)をはじめ、帝国教育会編『帝国教育』第428号の「民族的国家的見地の教育(一)」(1918b)、同じく『帝国教育』第429号の「民族的国家的見地の教育(二)」(1918c)、尼子止編の著作『最近教育学の進歩』に収録された「最近の学校教育」(1918d)、『京都小学五十年誌』に掲載された「文化的品性の教育」(1918e)、雑誌『雄弁』第10巻第1号の「新人生活の意義」(1919a)、本願寺教務部編になる『第八回布教研究会講演集』収録の「同化教育と創造教育」(1919b)、『哲学雑誌』第34巻第388号の「教育思想に於ける「自由」の観念」(1919c)、『哲学雑誌』第34巻第389号の「教育思想に於ける「自由」の観念(承前)」(1919d)、『児童教育研究会紀要』第1巻に収められた「教育に於ける広義の実験的研究に就て」(1919e)、『帝国教育』第447号の「教育理想と人生観」(1919f)、『幼児教育』第19巻第11号の「フレーベルと現代思潮」(1919g)、『帝国教育』第448号の「大思想家及大教育家の人生観と教育思想」(1919h)、『帝国教育』第449号の「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(二)」(1919i)、教育論叢編集部編の著作『学習経済論』に収録された「学習経済の疑義」(1919j)、『帝国教育』第450号の「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(三)」(1920a)、『帝国教育』第451号の「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(四)」(1920b)、『帝国教育』第452号の「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(五)」(1920c)、『帝国教育』第453号の「自由の発達の階段」(1920d)、本願寺教務部編『第九回布教研究会講演集』に収録された「歴史観と教育」(1920e)、『帝国教育』第454号の「文化的人格の内容」(1920f)、『帝国教育』第459号の「米国に於ける小学教育の変遷」(1920g)、日本弘道会編の雑誌『弘道』第344号に収められた「自由教育は世界の大勢」(1920h)、田中周平編の『講習会筆記録』に収録された「生活としての教育」(1920i)、「歴史と教育」(1920j)、「人本主義と教育」(1920k)、『帝国教育』第461号に掲載された「国体と教育」(1920l)、教育論叢編集部編の著作『個性教育論』に収められた「全体的個性と教育」(1920m)、成城小学校編『児童中心主義の教育』収録の「教育の内容的意義」(1921a)、大日本学校衛生協会編『日本学校衛生』第9巻第7号に掲載された「子供と性の教育」(1921b)、労働立国社編『労働立国』第1巻第3号に収録された「第一階級の自由と国体精神」(1922a)、『帝国教育』第484号の「現代の欧米教育」(1922b)、国民教育奨励会編の著作『大戦後の欧米教育』に収められた「欧米の道德教育」(1922c)と「産業文化と教育」(1922d)、成城小学校第二回研究会講演集でもある小原国芳編『教育行脚と私たち』に収められた「欧米の道德教育・産業文化と教育」(1922e)、『自然の暴力関東大震災実記』に収録され

た「震災後の教育をどうする」(1923a), 単著『女子教科最新教育学』(1923b)においては, ニーチェに対する言及は一切ない。

ニーチェが久々に登場するのは, 1923年出版の著作『教育思想の研究』(1923c)<sup>註16</sup>である。具体的には, 「思想編」の第9章に「ニイツエの教育論—強者の教育」という論攷が収録されているが, 実際のところこれは1917年の論文「ニイツエの学制論」(1917b)の再録であり, 加除修正すらほとんど確認できない。

1923年著作『教育思想の研究』の後は, 『親鸞教』第43巻第1号に掲載された「共存生活と信仰」(1924a), 沢柳政太郎や長田新らとの1924年共著『現代欧米教育大観』, 帝国教育会編『震災と教育』収録の「震災と国民的覚醒」(1924b), 『教育学術界』第49巻第5号の「自我の内在的内容としての教育」(1924c) および「ペスタロッチーの宗教教育」(1924d), 土田杏村編『教育学紀要』第1巻に収録された「聖の教育」(1924e) および「戦後の独逸に於ける道德教育の新運動」(1924f), 『現代思潮大観』収録の「欧米の教化生活」(1925a), 『教育学術界』第51巻第3号の「労作教育の問題」(1925b), 『懷徳堂文学術講演集』に収められた「現代教育思潮批判」(1925c), 蘭契会から出版された第二回島田夏期講座筆録『教育の本質及教育問題』(1925d), 武山魁山編『宗教教育及社会問題』収録の「宗教と教育」(1926a), 単著『最新教育学』(1926b), 崇仁尋常小学校編『ペスタロッチーに復れ!』に収録された「ペスタロッチーと関連」(1927a), 小原国芳編『ペスタロッチー研究』収録の「全人としてのペスタロッチー」(1927b), 1927年に公刊された長田新との共著『最新小学校管理法』, 『全人』第19号に収められた「あゝ沢柳先生」(1928), 雑誌『小学校』第46巻第4号に掲載された「思想問題と教育」(1929), 石井蓉年との共編になる1929年の選集『少年少女鳩翁道話』, 単著『教育の本質観』(1930a), 小原国芳編『宗教教育の理論と実際』収録の「ペスタロッチーの宗教教育」(1930b), 小原国芳編『玉川塾參觀記』収録の「世界教育史上に於ける玉川学園の地位」(1930c), 成城学園編『教育問題研究』第47号に掲載された「総長としての御挨拶」(1930d), 同じく『教育問題研究』第50号に掲載された「自学の真理」(1930e), 『少年赤十字』第78号に収められた「よく働くこと・拜むこと—少年少女への私の希望—」(1930f), 単著『労作教育』(1930g), 『教育問題研究』第58号に収録された「青年の心理と現実的価値—成城高等学校第三回卒業式訓辞—」(1931a), 『郷土科学』第9号に掲載された「郷土と無限性」(1931b), 日本児童協会編『母と子』第12巻第10号収録の「教育の本質」(1931c), 同じく『母と子』第12巻第12号の「家庭生活に於ける父性について」(1931d), 高橋俊乗との共著になる1932年著作『統合近世教育史』, 『教育問題研究』第70号の「卒業生に贈る言葉」(1932a), 玉川学園出版部から公刊された単著『塾生と語る』(1932b)と続くが, やはりここでもニーチェへの言及は見られない。

1923年の再録を除けば1917年のニーチェ論以来となるニーチェへの言及が見られるのは、1930年代前半に金港堂書店から出版された修身教科書、すなわち1932年の『昭和実業修身教科書教授資料・巻二』（1932c）と1934年の『昭和農業修身教科書教授資料・巻一』（1934b）においてである。ニーチェが登場する箇所はともに「謙遜」という徳目の解説であり、内容も全く同一である。小西は次のように述べる。「謙遜の教養と訓練とはキリスト教会に於て自己完成のための勤行の傍ら、偶然に若くはニイチェの謂ふ如く奴隷根生から発生するものでなく、反つて道徳的自負自悦に対する欠くべからざる自衛の途であり、深奥なる欲求から生れたる反対作用である。この道徳的自負自悦は道義的自尊より容易に発生する。」（小西 1932c, 71頁・小西1934b, 43頁）——「ニイチェの謂ふ如く奴隷根生から発生するものでなく」というコメントから、小西がニーチェの主張を全否定していることは明白である。

その後も、『昭和実業修身教科書教授資料・巻三』（1932d）、単著『教育原理と自由』（1932e）、『現代教育学』（1932f）、『教育理想の内容』（1933a）、『日本木材工芸』第1巻に掲載された「教育の本質と労作教育」（1933b）、『教育科学』第19冊収録の「教育本質論の発展」（1933c）、小西が監修した1933年公刊の『昭憲皇太后御歌読本』、単著『思想千秋』（1934a）、『昭和農業修身教科書教授資料・巻二』（1934c）、1934年の編著『会計法規講義案』、『信濃教育』第573号に掲載された「教育の本質」（1934d）、教化振興会編『滿蒙講座』に収められた「労作教育」（1934e）にニーチェへの言及は見られない。

1935年には玉川学園出版部から5巻本の『小西博士全集』が出版され、その第3巻に「ライ氏の実験教授学（筋肉運動主義）について」、第5巻に「エレン・ケイの「児童の世紀」に就て」および「ニイツエの教育論—強者の教育」が収録されているが、ライとケイの論文については1912年著作『現今教育の研究』から誤植もそのままに、またニーチェ論については1923年の『教育思想の研究』再録時のバージョンをそのまま転載したかたちになっている。もちろん、全集の第1巻、第2巻、第4巻にニーチェは登場しない。

そして、全集以降はニーチェへの言及が一切見られなくなる<sup>註17</sup>。具体的には、単著『日本的自覚』（1935d）から、有坂勝久編『直観（自然）科の施設と経営』に収められた「教育の本質と自然科」（1936a）、東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編『教育研究』第447号に掲載された「教育の本質と方法」（1936b）、『教育学術界』第73巻第1号の「教育の浪費と教育改善」（1936c）、『改訂昭和実業修身書教授資料・巻一』（1936d）、熊本市立高等女学校編『尊き婦人の力』収録の「労る心」（1936e）、大久保勇市編『教学刷新の本義と実践』に収められた「教育者としての廣瀬淡窓」（1936f）、日本弘道会編『弘道』第538号の「敬と実践的精神」（1937a）、日本両親再教育協会から出版された単著『母のための教育講話』（1937b）、大阪府神道各教連

合会編『神道大学講座講義録・上巻』に収められた「宗教教育に就いて」(1937c), 単著『教育精神の研究』(1937d), 1937年に出版された長田新との共著『新制準拠統合各科教授法』, 広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会編『学校教育』第300号に掲載された「歴史性と教育」(1937e), 海事教育振興会から出版された神戸高等商船学校における講演録『人間性の本質と日本精神』(1937f), 『弘道』第548号に収録された「銃後の勤儉生活」(1938a), 『文藝春秋』第16巻第1号に掲載された「はたらくことの教養」(1938b), 『教育研究』第476号の「国民精神の根本的培養」(1938c), 永澤金港堂から出版された単著『新制準拠現代教育学』(1938d), 『成城文化史』収録の「新学校と人材」(1938e), 『社会衛生』第3巻第1号に掲載の「敬と健康」(1938f), 『読書随筆』に収められたエッセイ「決闘」(1938g), 日本文化協会から日本文化第二十五冊として出版された『天地の大道と親心』(1938h), 国民訓育連盟編『教育行践・日本人の訓育』に収録された「師道と親心」(1938i), 『教育研究』第492号に掲載された「長期建設と教育上の重点」(1939a), 単著『教育読本』(1939b), 『教育学術界』第79巻第1号の「日本教育の本質と労作」(1939c), 『文藝春秋』第17巻第9号に掲載された「時は生命」(1939d), 『弘道』第565号の「日本精神と実践性」(1939e), 『帝国教育』第729号に掲載された「青少年学徒に賜はりたる勅語を奉体して将来の教育に望む」(1939f), 『最新日本教育学十二講』に収録された「実践教育としての日本教育」(1939g), 『帝国教育』第735号収録の「輝く二千六百年」(1940a), 『弘道』第572号の「至誠と興亜の精神」(1940b), 『市町村雑誌』第555号に掲載された「至誠と興亜精神」(1940c), 『学校教育』第332号に収められた「皇道の宣揚と永久的長期建設」(1940d), 『保育』第36号に掲載された「神性の充実鍛錬」(1940e), 『皇国の道と教育』収録の「皇国の道と親子心」(1940f), 広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会編『皇道帰一の教育』に収められた「皇道の宣揚と永久的長期建設」(1940g), 『皇民錬成師道行』収録の「実践実行に就いて」(1940h), 『国民学校案』収録の「興亜の大業と大国民」(1940i), 『基礎的錬成・労作教育論』に収められた「労作的実践と基礎的錬成」(1940j), 『自学自習論・個性尊重論』収録の「日本の教育と個性と自学自習」(1940k), 『生活教育論・郷土教育論』に収録された「国民の生活と国民教育」(1940l), 『国民科研究』に収められた「公衆道德の修練」(1940m), 『東京堂月報』第27巻第10号掲載の「先哲読書叢談」(1940n), 『信濃教育』第648号の「教育勅語と国民学校の本義」(1940o), 『弘道』第581号に掲載された「教育勅語と大国民の養成」(1940p), 『文化日本』第4巻第10号に収められた「敬・愛・信の生活体制」(1940q), 『雄弁』第31巻第11号に掲載された「社会の品位」(1940r), 『社会事業研究』昭和15年11月号の「社会事業の基本精神」(1940s), 『手工研究』第244号収録の「国民学校と労作」(1940t), 同じく『手工研究』第245号の「国民学校と労作(続)」(1940u), 『芸能科研究』に収められた「善美一体の教育」(1940v), 『手工研

究』第246号掲載の「教育に於ける労作（終）」(1941a), 『弘道』第584号に掲載された「新体制と抱擁到誠の精神」(1941b), 『公論』第4巻第1号に収録された「山鹿素行の精神—興亜大国民の教養—」(1941c), 『文藝春秋』第19巻第1号掲載の「日本旅館に於ける待遇の簡易化」(1941d), 教学局編『日本諸学振興委員会研究報告第一篇（教育学）』に収録された「教育家としての廣瀬淡窓」(1941e), 『保育』第49号掲載の「大国民としての教養」(1941f), 玉川大学出版部から公刊された『時局と教育の本義』(1941g) および『国民教育と親心』(1941h), 『弘道』第590号に掲載された「国防国家と道徳戦」(1941i), 『保育』第52号に掲載された「先哲の師弟生活」(1941j), 『学鏡』第46巻第1号に掲載の「珍書の楽」(1942a), 全日本映画教育研究会編『映画教育講座』に収められた「実践的大国民の教育」(1942b), 宮崎小次郎編『食のこゝろ』に収録された「会津の朝飯」(1942c), 草場弘との共編著『大東亜戦争と教育者の決意』に収められた「敬・愛・信」(1942d), 単著『国民教育の基本的研究』(1942e), 『歴史日本』第1巻第5号掲載の「青年は歴史を生む」(1942f), 『帝国教育』第770号に掲載された「御沙汰を拝して」(1942g), 1942年に公刊された高橋俊乗との共著『臣民の道通釈』, 『保育』第70号に収められた「雪と遊ぶの記」(1943a), 『皇国中学修身書』第3巻(1943b), 『教育学研究』第11巻第11号に掲載された「敬の教育」(1943c), 『帝国教育』第787号に掲載の「教育と学術」(1944a), 日本教育学会編『教育学論集』に収められた「廣瀬淡窓を繰り返す」(1944b), 単著『鷹山公と平洲先生』(1944c), そして戦後に出版された単著『民主教育の本質』(1947a) および『新日本建設とベスタロッター』(1947b), さらに遺作となった1948年の著作『感謝の生涯』に至るまで, ニーチェへの言及は一切ない。1917年のニーチェ論を契機に, 小西はいわばニーチェを見限ったのである。

1901年というかなり早い時期にニーチェへ言及し, 1902年からの留学時にはニーチェの著作を愛読, 帰国後にはケイやライに関する論文においてニーチェに触れ, 1917年には講演論文「われわれの教養施設の将来について」を取り上げてニーチェ論を詳述した小西であったが, 同論文において非教育学的な性格を有するニーチェの教育論を酷評し, これ以降は, 既出論文の再録やごくわずかな批判的注釈を除いて, ニーチェに対する言及をやめる。このように総括できる小西教育学とニーチェ思想との関係性をいっただいどう考えればよいのだろうか。小西重直におけるニーチェ受容の特質とはどのようなものなのだろうか。

## 6. 小西重直の教育学におけるニーチェ受容の特質

### (1) 初期ニーチェの限定的受容

第一の特質は, 小西がニーチェの教育観をもっぱらその初期思想に求めたことである。とい

うのも、中島半次郎、篠原助市、田制佐重、長田新など、小西と同時代を生きた教育学者の多くはニーチェの後期思想に目を向け、「超人」や「力への意志」にニーチェの教育観を読み取ろうとしているからである。ここでは、小西とはほぼ同時期の1918年にニーチェ論を発表した渡部政盛を例に、小西との違いを確認しておこう。

渡部は、1918年著作『最近教育学説の叙述及び批判』<sup>註18</sup>の第4章「個人的教育学の思潮及批判」に「ニイチェの教育説」と題する論文を収録し、その冒頭で次のように述べる。「所謂超人主義の教育を主張したものは、有名な独逸の詩人的哲学者、フリードリツヒ・ニイチェである。勿論ニイチェはこれを纏まつた教育説として世に公にしたのではない。其の文学的作物、即ち「ツアラツストラ」、及び瑞西バーゼル大学教授時代の講演、「我が教育制度の将来」等の中から、吾々が其の思想を拾つて然く云ふのである。而もこれらの作物は広く各国の人々に読まれ、思想界に深く影響を及ぼしたことは言ふまでもない。彼のグルリツトの教育説、エレン・ケイの教育説は、此のニイチェの思想に直接間接影響を受けてをることは云ふまでもなく、又吾が国に於ても、曾て登張竹風・高山樗牛等の徒が、ニイチェの天才主義を唱道して、世人の耳目を驚かしたことは、皆よく人の知つてをるところである。」(渡部 1918, 97-98頁)

講演論文「われわれの教養施設の将来について」やエレン・ケイへの影響に触れている点は小西と重なるが、後期著作『ツアラトウストラ』にもニーチェの教育観を読み取ろうとし、その骨子を「超人主義の教育」と特徴づけている点は、決定的に異なっている。渡部によれば、「ニイチェは如何なる根本思想に立ち、教育意見を吐露したかと云ふに、それは超<sup>ユーベルメンシュ</sup>人の觀念の上にこれを打ち立てたのである」(渡部 1918, 98頁)。

「…ニイチェは此の理想を実現せんが為に、如何なる實際教育を念頭に描いたかと云ふに、超人を作るには、其の自由を抑圧せず、其の本性に訴へて、自己修養をさせねばならぬ。そして内部生活を革新して、至誠な道德性を發揮せしむることを心掛くることが肝要であると。蓋し彼は個性其のまゝの自然助長を主張したのである。其の教育法としては、哲学・芸術等に依て精神的渴望を癒し、芸術的本能を伸張せしめ、古典に依て希臘人羅馬人の世界観人生観を味得せしむることが必要である。と言つてをる。」(渡部 1918, 99頁)——渡部はニーチェの「超人」説をこのように概括する。

もっとも、渡部は個人文化を尊重した点においてニーチェの「超人」思想が「或る意味に於ては極めて正当なことである」(渡部 1918, 100頁)と評価しつつも、「超人主義は大部分空想の所産なること」を指摘し、「超人は實際此の世に出現するを望み得るか否か、疑問であり(…略…)仮りにも出現を望み得るとしても、果して斯かる内容を有する超人の社会人生は、今日の社会人生よりも幸福であり理想的であるかは容易に断定することを得ない」と述べたうえ

で、最終的には「殊に其の権力意志説や道徳排斥論は、吾々には狂人の妄語としか考へられな  
い」と酷評した（渡部 1918, 102-103頁）。ただ、ニーチェの教育観を渡部がもっぱら後期著作  
『ツァラトゥストラ』の「超人」思想に求めようとしていたことは事実である。

一方の小西は、卒業論文「倫理上の自我観念」（小西 1901b, 1901c）および「エレン、ケイ  
の「児童の世紀」に就て」（小西 1906c）の中で数回「超人間」に触れたほか、「ドクトル「ライ」  
氏実験教育学講述大要」（小西 1906e）において1度だけ「力の意志」に言及してはいるが、そ  
れ以降は全く取り上げず、1917年のニーチェ論においても「超人」と「力への意志」は一切登  
場しない。小西にとってニーチェの教育観は、多くの教育学者が注目した後期思想にではなく、  
初期思想の講演論文「われわれの教養施設の将来について」にこそ求められるべきものだった  
のである。

## （2）ニーチェ思想に対する厳格な評価

第二の特質は、小西がニーチェ思想の教育学的意義をほとんど認めず、最終的にはニーチェ  
との関わりを謝絶したということである。このことが特筆すべきなのは、上述したように、一  
面においては小西がもっぱらニーチェの初期思想からその教育観を読み取ろうとしたからであ  
り、他面においては小西教育学それ自体がいわば非教育学性を帯びていたからである。

初期思想の限定的受容ということでは想起されるのは、ドイツの教育学者エルンスト・ヴェー  
バー（Ernst Weber, 1873-1948）の1907年著作『若きニーチェの教育学的思想』である。とい  
うのも、この著作はまさにその表題が示すとおり、考察対象を「若きニーチェ」＝「ニーチェ  
の初期思想」に限定することで、後期思想に多く含まれるニーチェの非教育学的な要素を除去  
し、結果的にニーチェの教育学的意義を積極的に評価することに成功したからである。しかし  
小西は、「超人」や「力への意志」が含まれた後期思想を捨象しただけではなく、初期思想に  
示されたニーチェの教育観それ自体も批判し、1917年の論文発表以降、ニーチェに関する発言  
をやめる。小西は、ニーチェの初期思想——しかも講演論文「われわれの教養施設の将来につ  
いて」のみ——を集中的に論じたのにもかかわらず、ニーチェ思想の教育学への受容可能性を  
否定したのである。

非教育学的なニーチェ思想に対する厳しい評価ということでは想起しなければならないのは、  
そもそも小西自身が体系的教育学を避けていたという事実、すなわち小西教育学それ自体がい  
わば非教育学的な性格を有していた点である。非教育学的な小西教育学と非教育学的なニー  
チェ思想、一見したところ親和性があるように思われるが、実際のところ、この両者はほとん  
ど相容れなかった。この点をどう考えればよいのだろうか。

たしかに小西は、体系的教育学の構築を目指す学者然とした教育学者ではなかったかもしれない。しかしながら、厳しい自己修養を通じて弟子の教育に心血を注いだ教育者<sup>註19</sup>として「人格教育学」や「生命教育学」を体現したわけであり、その意味では歴とした教育学者であった<sup>註20</sup>。だからこそ小西は、一部の特権階級のみを優遇するような非教育学的なニーチェの教育観を斥けたのである。

長田は、1908年の著作『学校教育』を例示しつつ、小西教育学には「数多くの学者・思想家の思想が自由自在に摂取されてゐる」（長田 1949b, 18頁）と述べる。長田によれば「古今の聖賢の思想を先生【※引用者註：小西】は単に学ぶだけではなくて自己自身の思索に依つて完全に主体化してゐる」（長田 1949b, 18頁）のである<sup>註21</sup>。しかし、小西教育学のほぼ全ての著作論文を確認する限り、ニーチェの思想が自由自在に摂取されている形跡はなく、またニーチェの主張が主体化され小西自身の思想となって表出しているような箇所も見当たらない。小西が理想と仰ぎ、自らの思想として主体化しようとした古今の聖賢は、ペスタロッチであり、廣瀬淡窓であった。それは、「ペスタロッチーと関連」（1927a）、「全人としてのペスタロッチー」（1927b）、「ペスタロッチーの宗教教育」（1930b）、『新日本建設とペスタロッチー』（1947b）、「教育者としての廣瀬淡窓」（1936f）、「教育家としての廣瀬淡窓」（1941e）、「廣瀬淡窓を繰り返す」（1944b）など、両者に関する著作論文の本数やタイトルが証明していよう。

「小西は、宗教的生命が自らの人格の中核になっている教育者としてペスタロッチーをあげる。彼は、その生涯を通じて、ペスタロッチーの理論と実践に、特にその教育者としての人格に傾倒した。」（稲葉 2004, 310頁）——稲葉によれば、「このペスタロッチーは、教育者小西にとっては、己れにおいて実現すべき教育者の理想像でもあった」（稲葉 2004, 310頁）という。また長田は「就中廣瀬淡窓に対する先生の渴仰の如きは神に対するほどだつた」（長田 1949b, 26頁）と述べ、小西に対する廣瀬淡窓の影響力の大きさを強調している。小西教育学の非教育学的性は、ニーチェではなく、ペスタロッチや廣瀬淡窓の思想を迎え入れるためにこそ発揮されたのである。

## おわりに

1901年という日本の教育学史上もっとも早い時期にニーチェの思想に言及し、留学先のドイツではニーチェの著作を愛読、帰国後にはケイに対するニーチェ思想の影響に触れ、1917年には「ニイツエの学制論」と題する本格的なニーチェ論も発表した小西重直であったが、全体を通してそのニーチェ受容は低調であり、ニーチェ思想への評価も消極的なものであったと言え

よう。とりわけ1917年以降の小西は全くと言ってよいほどニーチェに言及せず、その対応はいわば黙殺状態に近かった。結論的に言うなら、小西重直はニーチェ思想の教育学の意義を認めなかったのである。

では、このように総括できる小西教育学のニーチェ受容にはどのような意味があるのだろうか。以下、その同時代的意味と現代の意味をそれぞれ提示し、本稿の結論としたい。

第一に注目したいのは、ニーチェ思想の非教育学性をめぐる対応についてである。すでに述べたように、小西は自身が非教育学性を志向しながら、決して非教育的なニーチェ思想を許容することはなかった。ところが、小西の薫陶を受けた篠原助市や長田新は、ニーチェ思想の非教育学性に寛容な態度を示し、小西が考察対象から除外した「超人」や「力への意志」にこそニーチェ思想のオリジナリティを認めた。実際、篠原は非教育学者＝哲学者としてのニーチェが教育界に及ぼす影響力の大きさを踏まえつつ「教育者としてのニーチェ」という解釈モデルを提示している<sup>註22</sup>、長田もニーチェ思想を包括的に「生の哲学」と捉えることでニーチェ思想の教育学の意義を高く評価している<sup>註23</sup>。

篠原や長田が非教育的なニーチェ思想を許容することができたのは、ニーチェの全体像を巨視的に捉えていたからである。それに対して小西は、一時的にはあっても、ニーチェ思想に沈潜したと言えよう。留学中にニーチェを愛読していたというエピソードもさることながら、単独のニーチェ論を学術雑誌に寄稿した例は当時の教育学界では珍しい。小西はニーチェの具体的な教育観を解明するために敢えてニーチェの一作品に考察対象を絞り、その内容を詳細に検討した上で、教育学者として誠実かつ厳格にニーチェの思想を評価したのである。結果的には否定的な評価になったが、小西の1917年論文「ニイツエの学制論」は——『哲学研究』という掲載誌名が示すように——ニーチェ思想が研究対象となることを証明する試みでもあったと言えるだろう。

第二に指摘したいのは、ニーチェの初期思想に焦点化する限定的受容の先駆的意義である。というのも、小西のような初期ニーチェの限定的受容は、「ニーチェ初期作品にみられる教育観」(森野 1987)、「中断した幸福の国建設計画—ニーチェの講演『我々の教育施設の将来について』をめぐって—」(川畑 1989)、「初期ニーチェの教育観」(麦倉 1989)、「初期ニーチェにおける教育論—ギムナジウムにおける教養教育と自己教育思想—」(森本 2001)、「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論—Bildung理解を中心として—」(内藤 2006)などに見られるように、教育学におけるニーチェ受容史上、一つの潮流を形成しているからである。問題なのは、これらの論者が1917年論文「ニイツエの学制論」の存在に気付かず、それゆえにまた、小西という近代日本を代表する教育学者が非教育的なニーチェの思想とどのように向き合ったのかを知

らないという事実である。

小西の1917年論文「ニーツェの学制論」がニーチェの講演論文「われわれの教養施設の将来について」を詳述した最初の本格的研究であることは間違いないだろう。ともすれば「超人」や「力への意志」といった人目を引くキーワードを紹介する傾向にあった同時代の教育学者とは違い、小西はある意味で禁欲的にニーチェの教育観を論じている。ニーチェ思想に対する賛否は別として、非教育学的なニーチェの思想に教育学者として誠実に向き合う姿勢をこそ、われわれは小西重直に学ぶべきなのかもしれない。

## 【註】

- 註1 長田新や篠原助市におけるニーチェ受容に関する拙論(松原 2020b, 松原 2020c)において小西のニーチェ論を比較対象として取り上げたことはあるが、小西教育学におけるニーチェ受容の全貌を明らかにする作業は未実施のままである。
- 註2 原文は「研究されつたのである」となっている(小西 1917b, 72頁)。
- 註3 渡部によれば、小西との最初の出会いは以下のものであったという。「自分が小西先生と知合になつたのは、いつ頃からであつたかはつきりしない。多分大正六七年の時分、神田の池国(牛肉屋)で米沢会を開いたあの時ではなかつたかと思ふ。」(渡部 1929, 261頁)——「大正六七年」は西暦1917～1918年に当たり、ちょうど小西がニーチェ論を発表した頃である。「米沢会を開いた」とあるように、渡部も小西と同じ山形県出身であり、同郷のよしみという点もこの親密な関係の要因であったと思われる。
- 註4 渡部は次のように述べている。「故に氏の書いたものは、人をして衷心から読ましめる所がある。いさゝかも誇るとか、場当をしやうとか、谷本氏の如く人気をとらうとか、さう言ふ非学者的な山気が少しも無い。所説亦頗る穩健である。」(渡部 1920, 249頁)
- 註5 稲葉によれば、小西は教育勅語を欧米に輸出すべきと主張するほど高く評価していたという(稲葉 2004, 254頁)。
- 註6 教育者としての小西を高く評価する証言は枚挙に暇がない。たとえば渡部は「小西先生は天性の教育家で、大学教授だと云ふよりか高等師範学校長、乃至高等学校長が適任であると思ふ」(渡部 1929, 275頁)と述べているし、加藤は「小西重直先生は、教育学者として、また教育者として、明治・大正・昭和にわたっての、最もすぐれた人物のひとりであった」(加藤, 1頁)と賞賛する。また稲葉は、「教育者である以上に教育者として生きた至誠真実の人の小西は、その生涯を、学者としての、また教師としての修養に努力精進した人格であった」(稲葉 2004, 353頁)と述べている。ただ、小原国芳は個人的な恨みからか、小西のことをあまりよく言わない(小原 1980)。
- 註7 渡部が小西に人間的魅力を感じていたことは、次のような言葉からもうかがえる。「先生ももう少して停年に達せられる。停年になられたら是非でも自分は東京に引張り出したいと考へてをる。理由は頗る簡単である。時々訪ねていつては、子供のやうな気持ちになつて駄々をこねて見たいからである。」(渡部 1929, 275頁)
- 註8 大日本学術協会が公刊した1927年の著作『日本現代教育学大系・第4巻』収録の「小西重直氏教育学」においては、小西教育学が「一元的教育学」、「道徳中心の人的文化的総合的教育学」、「主意的教育学」と特徴づけられている(大日本学術協会, 45頁)。
- 註9 非売品の追悼論文集(小西 1901a)はあるが、公刊されたものとしてはこの論文がデビュー作である。
- 註10 吉田静致は「ニーチュエ」、長谷川天溪は「ニーツェ」という具合に、みな“Nietzsche”という綴りをどう

表記するまで悩んだのだろう。

- 註11 ケーベルが1895～1896年頃にニーチェ哲学を講義で取りあげ、「其文章は巧妙であるけれども、其の説は極端な利己主義で、排斥すべきものである」として、ニーチェを否定的に紹介したエピソードがある（桑木、1頁）。
- 註12 留学中に出版された著作に1902年の『ペイヨー氏意志教育』があるが、ニーチェへの言及はない。なお、小西がグロブ画「ペスタロッターとシュタンツの孤児」と出会ったのもこの留学中のことであった。このあたりの事情については丸山 2005に詳しい。
- 註13 たとえば、実力協会編『実力世界』第7巻第12号に掲載された論文「国民の精神的統一」（1916）や教育学術研究会編『戦後に於ける我国の教育』収録の「戦後に於ける教育思想の統一」（1917a）においてはニーチェへの言及がないことから、小西自身は必ずしもニーチェを戦争哲学者と見なしていたわけではないことがうかがえる。
- 註14 下地も指摘しているように、小西はドイツ語で書かれた講演論文の原著を入手する事ができず「ケネデーの英訳に基き論述しやうと思ふ」（小西 1917b, 56頁）と断りを入れ、タイトルを「吾人の学校の将来に就て」と表記した。
- 註15 ただ、「彼はパーゼル大学に招聘せらるゝ、前々年即其二十二歳の時に野砲連隊へ志願兵として入営し馬から落ちて負傷し除隊になつたのであるが兎も角も国の法律を遵奉したのである」（小西 1917b, 73頁）として、若かりし頃のニーチェがドイツ国家に忠誠を尽くしたという点については肯定的に評価している。小西はこうも言う。「彼が希臘古典の教育を推奨したのも独逸精神より離れんとしたのではなく寧ろ此中には独逸精神の内容を豊富に発達せしめ文化生活の準備たらしめんとの考も少らず含まれて居る様に見えるのである。即ち、彼が其当時に於て文化人を作らんとの考は一見独逸の国家を超越して居る様に思はれるけれども其実は従来の独逸の国家の教育政策を打破し真の独逸精神に基き益此を發展せしむることの出来る様な教育制度の根本思想に就て論述して居るのであつて若きニイツエは此点に於て独逸の国家に忠であつたと見ることが出来ると思ふのである。」（小西 1917b, 73-74頁）
- 註16 本書は関東大震災の直後に出版された。「自序」の冒頭、小西は次のように述べる。「今日は九月二日である。関東地方の大震災に次で東京横浜の全市焦土と化したといふ惨憺たる悲報が来た。四日前に姪を送つて東京へ行つた長男の安否が気遣はれる。親族知友の身の上も心配である。国民の一大不幸、人類の大惨事此儘じつとしては居れぬ様な気分被打たれて居る。」（小西 1923c, 自序1頁）
- 註17 木内によれば、1930年頃から小西は「宗教的な思索に沈潜し、前近代の伝統へと帰歸」しているという。木内はこう続ける。「小西は簡潔明瞭に、教育の本質は西洋教育学とは正反対のものである、と述べた。小西の反西洋的な態度は、幼少期の東洋的－日本ので、直観的－教育的な経験から生じている。小西によれば、敬意、愛、信頼は人間性の発露であり、また、両親の思いやりと子どもの心との美しい結びつきが日本精神の核心である、とする。小西の主張は、明らかに学問的な基礎づけを欠き、日本的な家族的国家観にもとづいている。」（木内 2008, 80頁）——ニーチェへの言及が見られなくなった背景には、戦争を契機する小西自身の国家観の変化があったと言えるかもしれない。なお、長田は小西の国家観について「戦争中はファッショになりかけた傾向も、あるいはないかと思つて心配しておつた」（長田ほか、23頁）と述べている。
- 註18 表紙と奥付には「渡部」ではなく「渡邊」とある。
- 註19 木内によれば、「小西の本領は、体系的教育学の樹立や新教育の指導というよりも、教育者としての自己修養のありかたを求め続けたことにあつた」（木内 2005, 110頁）。
- 註20 小西はケイの非体系性には寛容かつ肯定的であつた。「要するに女史の「児童の世紀」は体系を備へて居る教育学ではない。家庭学校社会の三方面に於て教育上目下の急務とする諸点を挙げて其弊を改良せんとする勢力である。冷静なる観念の結合知識の排列ではなく血あり肉ある所の熱誠の発表である。吾々は勿論教育に関する冷静なる理論的研究に傾聴する必要はあれども又時々燃ゆる様な熱情によりて吾々

の教育的活動に靈火を点してもらはなければ生氣のある仕事は出来難いと思ふ。知識上の刺激も固より大なる価値を有して居るが、意志や感情の働より生ずる刺激は吾々の活動の上に眞実の生命を与ふるものである。女史の「児童の世紀」は実に此の意味に於て吾々を利益することが少くないと信じて居る。」(小西 1906d, 32頁)

註21 たたとえば木内は小西教育学を次のように特徴づけている。「小西重直の教育学上の営為は、同時代の多くの西洋の教育理論の紹介と並んで、自己の体験に裏付けられた独自の唯心論的人格教育学と言われるものである」(木内 2005, 109頁)。厳しい自己修養を通じて主体的=非体系的に形成される小西教育学の特徴をたくみに表現しているといえよう。鯨坂もまた次のように述べている。「教育の本質を追求しようとする博士【※引用者注：小西重直】の道行きには、独自の特徴が見られる。博士はまずルソーやペスタロッチなどに親しむことによって、教育的事実のなかに求めようとした。すなわち、教育学の組織や体系を、言わば概念的に樹立するというような態度よりも、むしろ、教育的現実に悩み、苦しんだ先人の姿に見入り、彼等と同じ苦悩を内面に追体験することによって、教育の本質に迫ろうとした。博士においては体験が先であり、論理や概念は後であった。京都学派華やかなりし真只中において、おそらくは哲学的な思索や反省の方法による教育学の基礎づけという衝迫は、強く博士を誘ったに違いない。しかし、博士のとられた方法論上の立場は、哲学による教育学の理論づけというよりも、むしろ、現実や歴史による独自の教育哲学の樹立であった。」(鯨坂 1980, 131-132頁)

註22 松原 2021aを参照のこと。

註23 松原 2020bを参照のこと。

## 【参考文献】

### ○小西重直の著作論文(単著)

- 小西重直1901a「真友の死」小針静雄編『残紅録』(故小針文治追悼)非売品。  
 小西重直1901b「倫理上の自我観念」『哲学雑誌』第16巻第176号, 793-808頁。  
 小西重直1901c「倫理上の自我観念(承前)」『哲学雑誌』第16巻第177号, 915-940頁。  
 小西重直1902『ペイヨー氏意志教育』(続教育学書解説)育成会。  
 小西重直1905「瑞西境伊国巡歴報告」帝国教育会編『教育公報』第292号, 26-29頁。  
 小西重直1906a「趣味教育に就いて」広島高等師範学校教育研究会編『教育研究会講演集』第1号, 34-51頁。  
 小西重直1906b「品性の二大要素に就て」国学院大学編『国学院雑誌』第12巻第4号, 12-17頁。  
 小西重直1906c「エレン、ケイの「児童の世紀」に就て」『教育学術界』第13巻第4号, 16-21頁。  
 小西重直1906d「エレン、ケイの「児童の世紀」に就て(其の二)」『教育学術界』第13巻第5号, 25-32頁。  
 小西重直1906e「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要」『教育学術界』第14巻第2号, 25-31頁。  
 小西重直1906f「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要(第二回)」『教育学術界』第14巻第3号, 38-46頁。  
 小西重直1907a「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要(第三回)」『教育学術界』第14巻第5号, 24-31頁。  
 小西重直1907b「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評」『教育学術界』第15巻第1号, 17-24頁。  
 小西重直1907c『教育学』(小西文学士講演筆記／中野源次郎編)河野活版所。  
 小西重直1907d「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評(第六回)」『教育学術界』第15巻第2号, 24-30頁。  
 小西重直1907e「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評(第七回)」『教育学術界』第15巻第4号, 14-21頁。  
 小西重直1907f「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評(第八回)」『教育学術界』第15巻第5号, 39-46頁。  
 小西重直1907g「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評(第九回)」『教育学術界』第15巻第6号, 34-41頁。  
 小西重直1907h「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評」『教育学術界』第16巻第1号, 21-28頁。  
 小西重直1907i「ドクトル「ライ」氏実験教育学講述大要並ニ批評」『教育学術界』第16巻第2号, 18-26頁。  
 小西重直1908a「筋肉運動主義の教育に就て」広島高等師範学校教育研究会編『教育研究会講演集』第3号, 85-102頁。

- 小西重直1908b『学校教育』博文館。
- 小西重直1909「推諛と教育」『香川県報徳講演集』報徳会、11-35頁。
- 小西重直1910「無我の教育」広島高等師範学校教育研究会編『教育研究会講演集』第5号、26-34頁。
- 小西重直1911「群馬県教育品展覧会状況」帝国教育会編『帝国教育』第343号、59-61頁。
- 小西重直1912a「予が視察したる僻陬地の教育状態」帝国教育会編『帝国教育』第355号、56-59頁。
- 小西重直1912b『現今教育の研究』同文館。
- 小西重直1914「フィヒテの教育思想と現今の教育問題」京都文学会編『芸文』第5年第1号、136-153頁。
- 小西重直1915a「幼児保育の方針に就て」(京阪神総合保育会に於ける講演の筆記)『婦人と子ども』第15巻第3号、95-118頁。
- 小西重直1915b「我国児童教育の普及並に普通教法に関する概説」京都文学会編『芸文』第6年第4号、1-14頁。
- 小西重直1915c「我国児童教育の普及並に普通教法に関する概説(承前)」京都文学会編『芸文』第6年第5号、42-52頁。
- 小西重直1915d「我国児童教育の普及並に普通教法に関する概説(完結)」京都文学会編『芸文』第6年第6号、28-40頁。
- 小西重直1915e「輓近教育思想の発達及其批判」愛知県愛知郡教育会編『教育学講習会筆記録』。
- 小西重直1916「国民の精神的統一」実力協会編『実力世界』第7巻第12号、9頁。
- 小西重直1917a「戦後に於ける教育思想の統一」教育学術研究会編『戦後に於ける我国の教育』同文館、531-544頁。
- 小西重直1917b「ニイツエの学制論」京都哲学会編『哲学研究』第16号、56-74頁。
- 小西重直1918a「中学校に於ける歴史家の沿革並に其教育的価値に就て」京都帝国大学文科大学内史学研究会編『史林』第3巻第1号、42-55頁。
- 小西重直1918b「民族的国家的見地の教育(一)」帝国教育会編『帝国教育』第428号、7-9頁。
- 小西重直1918c「民族的国家的見地の教育(二)」帝国教育会編『帝国教育』第429号、6-10頁。
- 小西重直1918d「最近の学校教育」尼子止編『最近教育学の進歩』早稲田同文館、351-382頁。
- 小西重直1918e「文化的品性の教育」『京都小学五十年誌』435-440頁。
- 小西重直1919a「新人生活の意義」『雄弁』第10巻第1号、68-73頁。
- 小西重直1919b「同化教育と創造教育」本願寺教務部編『第八回布教研究会講演集』7-22頁。
- 小西重直1919c「教育思想に於ける「自由」の観念」『哲学雑誌』第34巻第388号、1-16頁。
- 小西重直1919d「教育思想に於ける「自由」の観念(承前)」『哲学雑誌』第34巻第389号、55-77頁。
- 小西重直1919e「教育に於ける広義の実験的研究に就て」『児童教育研究会紀要』第1巻、柳原書店、23-29頁。
- 小西重直1919f「教育理想と人生観」帝国教育会編『帝国教育』第447号、4-18頁。
- 小西重直1919g「フレーベルと現代思潮」『幼児教育』第19巻第11号、417-425頁。
- 小西重直1919h「大思想家及大教育家の人生観と教育思想」帝国教育会編『帝国教育』第448号、5-15頁。
- 小西重直1919i「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(二)」帝国教育会編『帝国教育』第449号、4-10頁。
- 小西重直1919j「学習経済の疑義」教育論叢編集部編『学習経済論』文教書院、199-210頁。
- 小西重直1920a「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(三)」帝国教育会編『帝国教育』第450号、22-32頁。
- 小西重直1920b「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(四)」帝国教育会編『帝国教育』第451号、44-55頁。
- 小西重直1920c「大思想家及大教育家の人生観と教育思想(五)」帝国教育会編『帝国教育』第452号、26-30頁。
- 小西重直1920d「自由の発達の階段」帝国教育会編『帝国教育』第453号、61-70頁。
- 小西重直1920e「歴史観と教育」本願寺教務部編『第九回布教研究会講演集』42-54頁。
- 小西重直1920f「文化的人格の内容」帝国教育会編『帝国教育』第454号、20-51頁。
- 小西重直1920g「米國に於ける小学教育の変遷」帝国教育会編『帝国教育』第459号、46-61頁。
- 小西重直1920h「自由教育は世界の大勢」日本弘道会編『弘道』第344号、55-56頁。
- 小西重直1920i「生活としての教育」田中周平編『講習会筆記録』三陽堂、23-35頁。

- 小西重直1920j「歴史と教育」田中周平編『講習会筆記録』三陽堂, 36-48頁。
- 小西重直1920k「人本主義と教育」田中周平編『講習会筆記録』三陽堂, 48-60頁。
- 小西重直1920l「国体と教育」帝国教育会編『帝国教育』第461号, 91-96頁。
- 小西重直1920m「全体的個性と教育」教育論叢編集部編『個性教育論』文教書院, 113-124頁。
- 小西重直1921a「教育の内容的意義」成城小学校編『児童中心主義の教育』大日本文華株式会社出版部, 187-219頁。
- 小西重直1921b「子供と性の教育」大日本学校衛生協会編『日本学校衛生』第9巻第7号, 55-59頁。
- 小西重直1922a「第一階級の自由と国体精神」労働立国社編『労働立国』第1巻第3号, 23-25頁。
- 小西重直1922b「現代の欧米教育」帝国教育会編『帝国教育』第484号, 7-27頁。
- 小西重直1922c「欧米の道德教育」国民教育奨励会編『大戦後の欧米教育』民友社, 189-251頁。
- 小西重直1922d「産業文化と教育」国民教育奨励会編『大戦後の欧米教育』民友社, 357-396頁。
- 小西重直1922e「欧米の道德教育・産業文化と教育」小原国芳編『教育行脚と私たち』(成城小学校第二回研究会講演集)文化書房, 198-221頁。
- 小西重直1923a「震災後の教育をどうする」『自然の暴力関東大震災実記』紅玉堂書店, 160-165頁。
- 小西重直1923b『女子教科最新教育学』金港堂書店。
- 小西重直1923c『教育思想の研究』廣文堂書店。
- 小西重直1924a「共存生活と信仰」『親鸞教』布教叢誌社, 第43巻第1号, 40-44頁。
- 小西重直1924b「震災と国民的覚醒」帝国教育会編『震災と教育』文化書房, 406-409頁。
- 小西重直1924c「自我の内在的内容としての教育」『教育学術界』第49巻第5号, 3-13頁。
- 小西重直1924d「ペスタロッチーの宗教教育」『教育学術界』第49巻第5号, 270-272頁。
- 小西重直1924e「聖の教育」土田杏村編『教育学紀要』第1巻, 中文館書店, 161-169頁。
- 小西重直1924f「戦後の独逸に於ける道德教育の新運動」土田杏村編『教育学紀要』第1巻, 中文館書店, 316-329頁。
- 小西重直1925a「欧米の教化生活」『現代思潮大観』同文館, 57-92頁。
- 小西重直1925b「劳作教育の問題」『教育学術界』第51巻第3号, 113-114頁。
- 小西重直1925c「現代教育思潮批判」『懷徳堂文科学術講演集』弘道館, 43-60頁。
- 小西重直1925d『教育の本質と教育問題』(第二回島田夏期講座筆録)蘭契会。
- 小西重直1926a「宗教と教育」武山魁山編『宗教教育及社会問題』貝葉書院, 1-133頁。
- 小西重直1926b『最新教育学』金港堂書店。
- 小西重直1927a「ペスタロッチーと関連」崇仁尋常小学校編『ペスタロッチーに復れ!』杉本書店, 1-4頁。
- 小西重直1927b「全人としてのペスタロッチー」小原国芳編『ペスタロッチー研究』アイデア書院, 3-11頁。
- 小西重直1928「あゝ、沢柳先生」成城学園編『全人』第19号, 9-17頁。
- 小西重直1929「思想問題と教育」『小学校』第46巻第4号, 146-147頁。
- 小西重直1930a『教育の本質観』玉川学園出版部。
- 小西重直1930b「ペスタロッチーの宗教教育」小原国芳編『宗教教育の理論と実際』玉川学園出版部, 1-10頁。
- 小西重直1930c「世界教育史上に於ける玉川学園の地位」小原国芳編『玉川塾参観記』玉川学園出版部, 57-69頁。
- 小西重直1930d「総長としての御挨拶」成城学園編『教育問題研究』第47号, 4-7頁。
- 小西重直1930e「自学の真理」成城学園編『教育問題研究』第50号, 1-5頁。
- 小西重直1930f「よく働くこと、拝むこと一少年少女への私の希望一」『少年赤十字』第78号, 12-13頁。
- 小西重直1930g「劳作教育」玉川学園出版部。
- 小西重直1931a「青年の心理と現実的価値一成城高等学校第三回卒業式訓辞一」成城学園編『教育問題研究』第58号, 1-4頁。
- 小西重直1931b「郷土と無限性」『郷土科学』第9号, 2-6頁。
- 小西重直1931c「教育の本質」『母と子』第12巻第10号, 5-8頁。
- 小西重直1931d「家庭生活に於ける父性について」『母と子』第12巻第12号, 19-21頁。

- 小西重直1932a 「卒業生に贈る言葉」成城学園編『教育問題研究』第70号、2-6頁。
- 小西重直1932b 『塾生と語る』玉川学園出版部。
- 小西重直1932c 『昭和実業修身教科書教授資料・巻二』金港堂書店。
- 小西重直1932d 『昭和実業修身教科書教授資料・巻三』金港堂書店。
- 小西重直1932e 『教育原理と自由』玉川学園出版部。
- 小西重直1932f 『現代教育学』金港堂書店。
- 小西重直1933a 『教育理想の内容』玉川学園出版部。
- 小西重直1933b 「教育の本質と労作教育」『日本木材工芸』第1巻、17-22頁。
- 小西重直1933c 「教育本質論の発展」『教育科学』第19冊、(小西) 1-11頁。
- 小西重直1933d 「教育の本質と日本の教育(上)」『教育学術界』第67巻第2号、7-16頁。
- 小西重直1933e 「教育の本質と日本の教育(下)」『教育学術界』第67巻第3号、2-10頁。
- 小西重直1933f 「日本精神について」『講演』12月中旬号、1-17頁。
- 小西重直1934a 『思想千秋』金港堂書店。
- 小西重直1934b 『昭和農業修身教科書教授資料・巻一』金港堂書店。
- 小西重直1934c 『昭和農業修身教科書教授資料・巻二』金港堂書店。
- 小西重直1934d 「教育の本質」『信濃教育』第573号、7-19頁。
- 小西重直1934e 「労作教育」教化振興会編『満蒙講座』立命館出版部、627-646頁。
- 小西重直1935a 『小西博士全集』第1巻、玉川学園出版部。
- 小西重直1935b 『小西博士全集』第2巻、玉川学園出版部。
- 小西重直1935c 『小西博士全集』第3巻、玉川学園出版部。
- 小西重直1935d 『日本の自覚』竹扁会。
- 小西重直1935e 『小西博士全集』第4巻、玉川学園出版部。
- 小西重直1935f 『小西博士全集』第5巻、玉川学園出版部。
- 小西重直1936a 「教育の本質と自然科」有坂勝久編『直観(自然)科の施設と経営』啓文社、2-3頁。
- 小西重直1936b 「教育の本質と方法」東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編『教育研究』第447号、3-6頁。
- 小西重直1936c 「教育の浪費と教育改善」『教育学術界』第73巻第1号、33-36頁。
- 小西重直1936d 『改訂昭和実業修身書教授資料・巻一』金港堂書店。
- 小西重直1936e 「労心」熊本市立高等女学校編『尊き婦人の力』80-82頁。
- 小西重直1936f 「教育者としての廣瀬淡窓」大久保勇市編『教学刷新の本義と実践』第一出版協会、85-102頁。
- 小西重直1937a 「敬と実践的精神」日本弘道会編『弘道』第538号、4-5頁。
- 小西重直1937b 『母のための教育講話』日本両親再教育協会。
- 小西重直1937c 「宗教教育に就いて」『神道大学講座講義録・上巻』大阪府神道各教連合会、166-181頁。
- 小西重直1937d 『教育精神の研究』明治図書。
- 小西重直1937e 「歴史性と教育」広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会編『学校教育』第300号、8-11頁。
- 小西重直1937f 『人間性の本質と日本精神』(神戸高等商船学校における講演録) 海事教育振興会。
- 小西重直1938a 「銃後の勤儉生活」日本弘道会編『弘道』第548号、7-9頁。
- 小西重直1938b 「はたらくことの教養」『文藝春秋』第16巻第1号、36-38頁。
- 小西重直1938c 「国民精神の根本的培養」東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編『教育研究』第476号、139-140頁。
- 小西重直1938d 『新制準拠現代教育学』永澤金港堂。
- 小西重直1938e 「新学校と人材」成城高等学校同窓会編『成城文化史』166-169頁。
- 小西重直1938f 「敬と健康」社会衛生協会編『社会衛生』第3巻第1号、2-6頁。
- 小西重直1938g 「決闘」『読書随筆』矢の倉書店、355-358頁。

- 小西重直1938h『天地の大道と親心』（日本文化第二十五冊）日本文化協会。
- 小西重直1938i「師道と親心」国民訓育連盟編『教育行践・日本人の訓育』第一出版協会，37-80頁。
- 小西重直1939a「長期建設と教育上の重点」東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編『教育研究』第492号，30-34頁。
- 小西重直1939b『教育読本』第一書房。
- 小西重直1939c「日本教育の本質と労作」『教育学术界』第79巻第1号，26-29頁。
- 小西重直1939d「時は生命」『文藝春秋』第17巻第9号，5-6頁。
- 小西重直1939e「日本精神と実践性」日本弘道会編『弘道』第565号，4-5頁。
- 小西重直1939f「青少年学徒に賜はりたる勅語を奉体して将来の教育に望む」帝国教育会編『帝国教育』第729号，4-5頁。
- 小西重直1939g「実践教育としての日本教育」『最新日本教育学十二講』文教書院，1-19頁。
- 小西重直1940a「輝く二千六百年」帝国教育会編『帝国教育』第735号，6-7頁。
- 小西重直1940b「至誠と興亜の精神」日本弘道会編『弘道』第572号，12-13頁。
- 小西重直1940c「至誠と興亜精神」『市町村雑誌』第555号，7-10頁。
- 小西重直1940d「皇道の宣揚と永久的長期建設」広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会編『学校教育』第332号，3-6頁。
- 小西重直1940e「神性の充実鍛錬」全日本保育連盟編『保育』第36号，2-5頁。
- 小西重直1940f「皇国の道と親心子心」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『皇国の道と教育』（国民学校研究叢書第二巻）玉川学園出版部，7-19頁。
- 小西重直1940g「皇道の宣揚と永久的長期建設」広島高等師範学校附属小学校学校教育研究会編『皇道帰一の教育』（国民学校の研究第二集）宝文館，1-5頁。
- 小西重直1940h「実践実行に就いて」『皇民錬成師道行』第一出版協会，（小西）1-12頁。
- 小西重直1940i「興亜の大業と大国民」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『国民学校案』（国民学校研究叢書第三巻）玉川学園出版部，1-17頁。
- 小西重直1940j「労作的実践と基礎的錬成」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『基礎的錬成・労作教育論』（国民学校研究叢書第四巻）玉川学園出版部，1-13頁。
- 小西重直1940k「日本の教育と個性と自学自習」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『自学自習論・個性尊重論』（国民学校研究叢書第五巻）玉川学園出版部，1-19頁。
- 小西重直1940l「国民の生活と国民教育」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『生活教育論・郷土教育論』（国民学校研究叢書第七巻）玉川学園出版部，1-13頁。
- 小西重直1940m「公衆道徳の修練」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『国民科研究』（国民学校研究叢書第八巻）玉川学園出版部，1-12頁。
- 小西重直1940n「先哲読書叢談」『東京堂月報』第27巻第10号，3-4頁。
- 小西重直1940o「教育勅語と国民学校の本義」『信濃教育』第648号，6-8頁。
- 小西重直1940p「教育勅語と大国民の養成」日本弘道会編『弘道』第581号，19-21頁。
- 小西重直1940q「敬・愛・信の生活体制」『文化日本』第4巻第10号，4-7頁。
- 小西重直1940r「社会の品位」『雄弁』第31巻第11号，102-103頁。
- 小西重直1940s「社会事業の基本精神」『社会事業研究』昭和15年11月号，29-33頁。
- 小西重直1940t「国民学校と労作」『手工研究』第244号，2-12頁。
- 小西重直1940u「国民学校と労作（続）」『手工研究』第245号，3-8頁。
- 小西重直1940v「善美一体の教育」小西重直・小野源蔵・小原国芳監集『芸能科研究』（国民学校研究叢書第十巻）玉川学園出版部，1-11頁。
- 小西重直1941a「教育に於ける労作（終）」『手工研究』第246号，3-7頁。

- 小西重直1941b「新体制と抱擁到誠の精神」日本弘道会編『弘道』第584号, 15-16頁。
- 小西重直1941c「山鹿素行の精神—興亜大国民の教養—」『公論』第4巻第1号, 168-173頁。
- 小西重直1941d「日本旅館に於ける待遇の簡易化」『文藝春秋』第19巻第1号, 280-282頁。
- 小西重直1941e「教育家としての廣瀬淡窓」教学局編『日本諸学振興委員会研究報告第一篇(教育学)』325-339頁。
- 小西重直1941f「大国民としての教養」全日本保育連盟編『保育』第49号, 2-3頁。
- 小西重直1941g『時局と教育の本義』玉川学園出版部。
- 小西重直1941h『国民教育と親心』玉川学園出版部。
- 小西重直1941i「国防国家と道徳戦」日本弘道会編『弘道』第590号, 9-11頁。
- 小西重直1941j「先哲の師弟生活」全日本保育連盟編『保育』第52号, 2-7頁。
- 小西重直1942a「珍書の楽」『学燈』第46巻第1号, 丸善株式会社, 18-21頁。
- 小西重直1942b「実践の大国民の教育」全日本映画教育研究会編『映画教育講座』四海書房, 9-18頁。
- 小西重直1942c「会津の朝飯」宮崎小次郎編『食のこゝろ』205-208頁。
- 小西重直1942d「敬・愛・信」小西重直・草場弘編『大東亜戦争と教育者の決意』第一出版協会, 1-20頁。
- 小西重直1942e『国民教育の基本的研究』永澤金港堂。
- 小西重直1942f「青年は歴史を生む」『歴史日本』第1巻第5号, 65-68頁。
- 小西重直1942g「御沙汰を拝して」帝国教育会編『帝国教育』第770号, 2-3頁。
- 小西重直1943a「雪と遊ぶの記」全日本保育連盟編『保育』第70号, 2-3頁。
- 小西重直1943b『皇国中学修身書』第3巻, 中等学校教科書株式会社。
- 小西重直1943c「敬の教育」日本教育学会編『教育学研究』第11巻第11号, 1-8頁。
- 小西重直1944a「教育と学術」帝国教育会編『帝国教育』第787号, 30-31頁。
- 小西重直1944b「廣瀬淡窓を繰り返す」日本教育学会編『教育学論集』新紀元社, 209-222頁。
- 小西重直1944c『鷹山公と平洲先生』同文社。
- 小西重直1947a『民主教育の本質』永澤金港堂。
- 小西重直1947b『新日本建設とペスタロッチー』西荻書店。
- 小西重直1948『感謝の生涯』永澤金港堂。

#### ○小西重直の著作論文(共著)\*年代順

- 松本孝次郎・小西重直1902『教育学新教科書』普及舎。
- 沢柳政太郎・小西重直・長田新ほか1924『現代欧米教育大観』同文館。
- 小西重直・長田新1927『最新小学校管理法』金港堂書店。
- 小西重直・石井蓉年選1929『少年少女鳩翁道話』ヨウネン社。
- 小西重直・高橋俊乗1932『統合近世教育史』金港堂書店。
- 小西重直監修1933『昭憲皇太后御歌読本』愛之事業社。
- 小西重直編1934『会計法規講義案』永澤金港堂。
- 小西重直・長田新1937『新制準拠統合各科教授法』永澤金港堂。
- 小西重直・高橋俊乗1942『臣民の道通釈』富山房。

#### ○小西重直に関する著作論文

- 鯉坂二夫1980「小西重直」小原国芳編『日本新教育百年史・第1巻総説(思想・人物)』玉川大学出版部, 122-136頁。
- 稲葉宏雄1994「小西重直における教育学の生成」『京都大学教育学部紀要』第40号, 47-81頁。
- 稲葉宏雄1995「明治期における小西重直の教育学」『京都大学教育学部紀要』第41号, 35-59頁。
- 稲葉宏雄2001「昭和期における小西重直の教育思想—「敬・愛・信」と「劳作」の教育学—」『龍谷大学論集』第457号, 50-75頁。

- 稲葉宏雄2002「小西重直の「国民学校」論」『龍谷大学論集』第459号、26-47頁。
- 稲葉宏雄2004『近代日本の教育学—谷本富と小西重直の教育思想—』世界思想社。
- 長田新1949a「小西重直先生を憶う」日本教育学会編『教育学研究』第17巻第4号、12-31頁。
- 長田新1949b「小西重直先生の教育学に就いて」京都哲学会編『哲学研究』第384号、11-27頁。
- 長田新・小林澄兄・永野芳夫・加藤仁平・後藤三郎1948「新教育と小西重直先生」（座談会）成城学園初等学校研究推進部編『教育改造』第16号、15-30頁。
- 小原国芳1971「新学校の回顧」小原国芳編『日本新教育百年史・第2巻総説（学校）』玉川大学出版部、505-552頁。
- 小原国芳1980「小西重直先生」（「新教育の回顧—その指導者、実践者、援助者及び反対者—」）小原国芳編『日本新教育百年史・第1巻総説（思想・人物）』玉川大学出版部、588-591頁。
- 加藤仁平1967『小西重直の生涯と思想』黎明書房。
- 木内陽一2005「新教育と教育学説の関係を考える」教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第14号、107-114頁。
- 木内陽一2008「学問性と実践志向のあいだ—近代日本教育学の展開—」（第2章第1節）、小笠原道雄・森川直・坂越正樹編『教育学概論』福村出版、67-82頁。
- 北野裕通2006「京都哲学と労作教育—片岡仁志・小西重直・西田幾多郎—」『相愛大学研究論集』第22巻3月号、65-88頁。
- 小西純1982「『実験教育学』と初期小西重直—『学校教育』（1908・明治41）の場合—」『大谷女子大学紀要』第17号、111-126頁。
- 佐々弘雄1935『続人物春秋』改造社。
- 大日本学術協会1927『日本現代教育学大系・第4巻』モナス。
- 中根環堂1940『観音の靈験』有光社。
- 布施賢治2021「同郷会と教学刷新—米沢有為会による「興讓学」建設について—」『駿台史學』第171号、71-98頁。
- 丸山恭司2005「グローブ画「ベスタロッターとシュタンツの孤児」の複製と伝播について—あるいは、教育運動における視覚メディアの役割—」『広島大学大学院教育学研究科紀要・第三部：教育人間科学関連領域』第54号、51-59頁。
- 森山賢一・松田史大1996「樋口勘次郎、小西重直から学ぶ労作教育論」筑波大学附属坂戸高等学校編『研究紀要』第33・34集、17-22頁。
- 文部省社会教育局1933『読書指導図書目録』文部省。
- 吉川榮一2020「蔡元培と小西重直」『明星大学全学共通教育研究紀要』第2号、85-95頁。
- 渡部政盛1918『最近教育学説の叙述及び批判』大同館。
- 渡部政盛1920『日本教育学説の研究』大同館。
- 渡部政盛1929『若き教育者に与ふる書』啓文社。

#### ○その他の参考文献

- 川畑篤弘1989「中断した幸福の国建設計画—ニーチェの講演『我々の教育施設の将来について』をめぐって—」『岡山大学教養部紀要』第25号、153-178頁。
- 桑木巖翼1902『ニーチェ氏倫理説一斑』育成会。
- 下地秀樹1998「『ニーチェの学制論』再考」立教大学文学部教育学科研究室編『立教大学教育学科研究年報』第42号、169-180頁。
- 内藤貴2006a「初期ニーチェにおける陶冶論と教育論—Bildung理解を中心として—」三田哲学会編『哲学』第115号、1-23頁。
- 松原岳行2020a「中島半次郎の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第75号、113-136頁。
- 松原岳行2020b「長田新の教育学におけるニーチェ受容とその特質—生の哲学者としてのニーチェ像の意味—」

『九州教育学会研究紀要』第47巻, 49-56頁。

松原岳行2020c「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質 (1) —1920年代の著作『批判的教育学の問題』, 『教育辞典』, 『理論的教育学』を中心に—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第76号, 45-69頁。

松原岳行2021a「篠原助市の教育学におけるニーチェ受容とその特質 (2) —1930年以降の著作『教育の本質と教育学』, 『増訂・教育辞典』, 『独逸教育思想史』, 『教育哲学』を中心に—」『九州産業大学国際文化学部紀要』第77号, 63-92頁。

松原岳行2021b「田制佐重の教育学におけるニーチェ受容とその特質」『九州産業大学国際文化学部紀要』第78号, 27-55頁。

麦倉達生1989「初期ニーチェの教育観」『滋賀大学教育学部紀要：人文科学・社会科学・教育科学』第39号, 11-34頁。

森野衛1987「ニーチェ初期作品にみられる教育観」『沼津工業高等専門学校研究報告』第21号, 233-241頁。

森本倫代2001「初期ニーチェにおける教育論—ギムナジウムにおける教養教育と自己教育思想—」青山学院大学教育学会編『教育研究』第45号, 1-14頁。

Weber, E. 1907: Die pädagogischen Gedanken des jungen Nietzsche im Zusammenhang mit seiner Welt- und Lebensanschauung. Leipzig 1907.

## 【付記】

本研究はJSPS科研費JP21K02275の助成を受けたものです。

